50%&50%

九曜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
５０％＆ａｍｐ；５０％

【Ｎコード】
Ｎ４２２７Ｉ

【作者名】
九曜

【あらすじ】
今の生活が嫌になり、ついに家を飛び出した周。
借りたマンションは２ＬＤＫで――、
「お帰りなさいませ、周様」
メイド付き！？
２ＬＤＫのマンションで繰り広げられる高校生・周と、幼馴染で大学生でメイド・月子の毎日――

第1話　「2LDKメイド付き！？」

「もう我慢できねぇっ。俺は家を出る！」
「どうしてそんなことを言うんだ、周！　うちには地位もある。名誉もある。金もある。小さい頃から欲しいものは何だって買ってやってる。美味しいものだって成人病を患いそうなほど食べさせてやってるじゃないか。例え患ったとしても良い医者を連れてきてやろう。これのどこが不満だって言うんだ！？」
「それがいかんのじゃあっ！　このままだと俺はダメになる！　緩やかに――否！　加速度的に唸りを上げて腐っていく！　だから決めた！　俺は家を出る。家を出て自立する！」
「そうか。わかった。ならば、パパを倒してから……ぉごばあっ！」
こうして鷹尾周（たかお・あまね）は、軽くひと悶着あったものの、家を出て（ついでにパパは病院に行って）、念願の自立した生活を手に入れた。
そのはずだった――。

ついにその日がきた。
周はそのマンションを見上げる。
部屋にはもう荷物が運び込まれているはずだ。まずはそれを開けて最低限生活できるようにしないと。その他のこまごまとしたものはゆっくりやっていけばいい。そうやって自分の生活空間を作っていくのもまたひとつの楽しみだ。
今からそれを考えて、わくわくしてくる。
周は階段を上り、部屋の前にくるとそのドアを開けた。
マンションは自分で決めた。築一年ほどでまだ新しく、この春から通う高校からも程よい距離にある。
間取りは2LDK。

そして――、
「お帰りなさいませ、周様」
「……」
なぜかメイド付きだった。

「どうぞ」
周の前、ダイニングのテーブルの上にティーカップが置かれる。
「……」
周はそれには手をつけず、まずはイスに座ったまま辺りを見回した。
あらかた片づいていた。
基本的にそれほど広い家ではないので、食器棚や冷蔵庫、ＴＶなどは、ここ以外にないだろうというような位置に落ち着いている。加えて、周が家から送った荷物の大半は梱包が解かれ、食器等があるべき場所に収まっていた。
「すみません。先に他のことに手をつけていたもので、まだすべて終わっていません」
周の動きを見てメイドが侘びの言葉を口にした。
とは言え、八割方終えている上、こうして紅茶まで即座に出せるのだから、充分に良い仕事をしていると言える。
しかし、特筆すべきは言葉の内容のわりには、口調に謝意も敬意も感じられないことだろう。「それがどうした。できなかったんだから仕方ない。何か文句でも？」と言わんばかり。顔に至っては無表情だった。
「いや、まあ、それはいいけど……いや、よくないんだけど。……月子さん、何でここにいるのさ？」
周はこのメイドと知らぬ仲ではなかった。
彼女は、名を藤堂月子（とうどう・つきこ）といい、周の実家の邸宅に家政婦として働いている藤堂の娘である。母親同様、月子も大学に通う傍らアルバイト的にメイドをやっているようだ。周も時々屋敷で働く月子を見

かけることがあった。
　また、小さい頃は周の遊び相手を任されていたようで、よく一緒にいた。「シュウちゃん」「月姉ちゃん」と呼び合って仲も良かったのだが、小学校も高学年になって周りの目を意識するようになった頃から、そうやって遊ぶこともなくなって今に至る。
「旦那様の指示です」
　メイド――月子は端整な顔に何の表情も加えず、簡潔に言った。
「親父め。余計なことをしやがって」
　あのとき父親だからと手心を加えず、もっと徹底的にやっておくべきだったと後悔した。むしろいっそのこと殺っておくべきだったか。
「なるほど。わかった。でも、もう帰っていいよ。後は自分でやるからさ」
「お断りします」
　月子は即答した。
「お断りって……いや、こういうことは最初から全部ひとりでやるべき……つーか、実際やることなんかもうほとんどないんだけどさ」
「お断りします」
「だから、俺は自立した生活を……」
「拒否します」
「これじゃ意味がなくて……」
「ダメです」
「ひとりで……」
「嫌」
　どんどん短くなっていく月子の返事は、ついに単語だけとなった。
「えっと、月子さん……？」
「……シュウ、うるさい」
　ぼそっと。
　小声で。
　それでいて周には聞こえるように。

「……うわ」
呼び捨てにしやがった。
別に月子を本当にメイドと思っているわけではないが、いちおうメイドとして派遣されてきて、エプロンドレスまで着ているのだから、それらしくふるまう努力はするべきなんじゃないかなーとか思うのである。
そういった抗議の意味も含めて周が月子を見ると、彼女はすっと視線を逸らした。
「……」
「……」
沈黙。
とりあえず、周は出された紅茶に口をつけた。美味い。味や濃さ、温度、すべてが完璧だった。いったいいつの間にこんな技術を身につけたのだろう。
そう言えば、周は自分が最近の月子のことをまったく知らないことに気がついた。ある日を境に意識的に月子を避けるようになって、次第にそれが当たり前のようになって、気がつけば自分の生活から月子はいなくなっていた。
それがこのようなかたちで再び身近になるとは思わなかった。
「とは言え、まさかこのまま毎日通いメイドをさせるわけにはいかないよなぁ」
月子には月子の生活がある。大学にだって行かなくてはならないだろう。加えて、周が望んでいた自立した生活の達成も危ぶまれる。
「いいえ、通いではありません」
と、そこで月子が訂正するように言った。
「住み込みでお世話をするようにと、旦那様から申しつけられています」
「住み込みねぇ。親父もいよいよ俺が信用できないらしい」
周は呆れたように紅茶をもう一口。
そして、おもむろに――、

「ぶーっ」
噴いた。
まるで使い古されたコントのようだ。
逆にそれが新鮮ですらある。
「住み込みだってーっ！？」
「はい」
月子は何ごともなかったかのような顔で淡々と台拭きでテーブルを拭きながら答えた。
「住み込みって、ここに？」
「はい。一般的な定義に沿って言えば、ここ以外にありえないかと」
住み込みとはそういうものである。
「いったいどこで寝るんだよ！？　まさか押入れか！？」
「残念ながら、私は未来から来たネコ型ロボットでもなければ、駆け出しの頃の漫画家集団のひとりでもありませんので」
わかりやすい例えとわかりにくい例えがひとつずつ。
「ということは……」
「はい。幸いここは部屋がふたつありますので……」
月子は周の追及の目から逃れるように顔を逸らした。その視線の先にはリビングから隣の部屋に繋がる扉がある。
「まさか……！」
周は椅子を蹴倒しそうな勢いで立ち上がった。
その扉に向かって走る。途中、梱包の解かれた段ボール箱をいくつか飛び越えた。そして、そのままの勢いで扉を開ける。
「うっわー……」
中に広がっていたのは見事に女の子の部屋だった。
ツッコミどころとしてはこの部屋がすでに完成されていて、キッチンやリビング以上に正常に機能していることだろう。
「先に手をつけてた他のことって、このことだったのかよ……」
要するに先に自らの住居を確保したのである。
「できれば――」

「うおっ」
月子がいつの間にか横に忍び寄っていた。
「メイドの部屋とは言え、いちおうそこは私室ですので、次からはノック、もしくは私の許可の下で開けてください」
「……申し訳ない」
確かにデリカシィに欠ける行為だったかもしれない。
周は反省する。
「いや、そうじゃなくて！　こんなの予想できねぇよ！　高校生のひとり暮らしでメイドさん付きなんてあるかよ！？」
「過去の例は兎も角、今ここに確固たる存在を確立していますが？」
「前人未到だ、わーい。アホかーっ」
いい感じに壊れつつある周。
しかし、それもたったひと言で粉砕される。
「……シュウ、うるさい」
ぼそっと。
やっぱり小声で。
斜め下に向かって、吐き捨てるように。
「……」
「……」
どうやらこのメイドさん、時々悪意に満ちた言葉を吐くらしい。
「では、これからよろしくお願い致します」
「……」
「お願い致します」
ずい、と顔を寄せてくる。
威嚇半分、脅迫半分。いい要素がない。
「よ、よろしくお願いします」
勢いに圧されて周が頭を下げる。
月子も下げる。
かくして、ここに２ＬＤＫメイド付きの生活が誕生した。

第2話　「初戦は惨敗」

朝。
それは鷹尾周が生まれ育った家を出て、最初の朝だった。
「周――、起きてくだ――」
未だ眠りの淵にある周を呼ぶ声。
「周様、起きてください」
より覚醒に近づいた意識で、さらにはっきりとその声を聞いた。
「あー……？」
誰だよ――
その声の主が誰かもわからないまま、周は目を開ける。
と、長い髪にカチューシャを乗せた、無表情ながら端整な顔の女性がこちらを覗き込んでいた。
「ッ！？」
驚いて弾かれたように上半身を起こす周と、それをわずかに身を反らしただけで避ける謎の女。
「……」
背を壁に貼りつかせながら改めて見てみれば、それは黒と白のエプロンドレスを身にまとった、どこからどう見てもメイドさん。月子だった。
「今のヘッドバッドは私への挑戦と見なしてよろしいでしょうか？」
なぜか目を好戦的に光らせる月子。
「違うわっ」
「それは残念です」
今度は言葉とは裏腹に、残念がる素振りを微塵も見せずにしれっと言う。
それから彼女は、立て膝の状態からすっと立ち上がり、一歩下がった。
「おはようございます、周様」

恭しく一礼。
「あ、あぁ……って、何で月子さんがここにいるんだよ！？」
「私はメイドですので」
思い出した。
昨日、自立した人間になるための第一歩としてひとり暮らしをはじめようとした矢先、父親の命令でやってきたというこのメイドが乗り込んできたのだった。
「黙っていたら際限なく寝るであろう周様を起こすのも仕事です」
「ほっとけっ」
吠える周。
「では、朝食ができていますので、着替えて顔を洗ってからきてください」
だが、月子はそれを無視。言うことだけ言って、再び礼をしてから部屋を出ていった。
丁寧に、音もなくドアが閉まった。
「……」
それを周はじっと見つめる。
明日からは鍵をかけるか――
と思ったところで、再度ドアが開いた。月子が顔を出す。
「なお、言っておきますが、鍵をかけても無駄ですので」
「……」
もはや何も言い返す気力が出なかった。
鍵をかけるとどう無駄なのか試してみたい気がしないでもない。実は部屋の鍵を持っているとか、そういうことだろうか。
「つーか、今何時だ？」
部屋を見回す。が、掛け時計はまだない。そもそも昨日の今日で引越しの荷物はまだ半分ほどしか片づいていないのだ。春休みだから早く起きることもないだろうと思って、目覚まし時計も出していなかった。
枕もとに置いた携帯電話を見る。

「9時、か……」
さすがにもう起きないとマズそうだ。

本日は焼き魚をメインとした純和風の朝食。
エプロンドレスのメイドが出してくる料理としてはミスマッチを感じないでもないが、しかし、文句なく美味しい。
それはいいのだが、
「昨日から聞こうと思ってたんだけど――月子さん、そこで何してんのさ？」
周は問う。
月子はテーブルから少し離れたところに立っていた。背筋を伸ばして、行儀よく。
「私はメイドですので、何かあったときのために、ここに控えています。用があれば言ってください」
「あ、あぁ、そう……」
実家でもこんな感じだったのは確かだ。家政婦の藤堂（月子の母親だ）が、「坊っちゃん、おかわりはいかがですか」「しょうゆのかけ過ぎは体に毒です」「『牛車』と書いて『ぎっしゃ』と読みます」などなど、よく気がついたりよけいなお世話だったりすることを、いろいろやってくれていた。
しかし、それはそれなりに広いダイニングでやるものであって、間取り2LDKのダイニングキッチンでやろうものなら違和感ありまくりである。
「すげぇ喰いづらいんだけど……」
「お気になさらず」
「……」
無理だっつーの。
周はとりあえず話を変えた。
「月子さん、朝メシは？」
「私は周様の後でいただきます」

「ふうん。大変だな、メイドも」
あくまでも他人ごとの感想を述べ、食事を続ける。
「なのでとっとと食べてください。後がつかえてます」
「ぶはっ」
危うく噴き出しかけた。
「わーったよ。喰えばいいんだろっ、喰えばよっ」
やけっぱちのように口の中にかき込み、周の今日の朝食は終了した。

朝寝のおかげですっかり短くなってしまった午前中は荷物の片づけ。
そして、朝食同様、何かに、というか月子に急かされるようにして昼食を取った後の――午後。周は外へ繰り出すことにした。
部屋を出て、短い廊下を経て玄関へ。スニーカーに足を突っ込む。
と、リビングへ通じるドアが開き、月子が姿を現した。
「周様、お出かけですか？」
直後、周はむっとした。
勉強をしようとした矢先に勉強しなさいと言われると、途端にやる気を失くすタイプだ。
「どちらへ？」
「どこだっていいだろ」
本当は駅前を中心に散策をしようと決めているのだが、押しかけメイドに言う義理はないと態度で示す。
「では、お帰りはいつ頃になりそうですか？」
「帰りたくなったら帰るよ。月子さんが出ていってくれたら、すぐにでも帰ってくるかもな」
投げやりに言い放ち、外へ飛び出した。
月子の顔は見なかった。己の態度の悪さを自覚しているから。月子がどんな顔をしているか、怖くて見ることができなかったのだ。
マンションの廊下へ出て、階段を降りる。

抱えていた罪悪感は、次第に別のものに変わっていった。
「やっぱりメイドなんてどうかしてる。このままじゃダメだ。なんとか出ていってもらわないと」
とは言え、気持ちがささくれ立っている今家に戻っても、どんな言葉が口から飛び出すかわかったものではない。ひとまず冷却のため、このまま予定通り前へ進むことにした。
駅までは徒歩１０分程度。
利用者が多いため、駅はわりと大きい。周辺には大型スーパーやショッピングセンターがある。少し離れたところにはシネマコンプレックスがあるらしく、バス停の並ぶロータリィにその案内が出ていた。
周は、まずはショッピングセンターの中にあった大型書店に入った。
テキトーにマンガ雑誌を読み荒らして1時間ほどの時間をつぶした後、一度外へ出る。
と、
「おい。あっちで超美人のお姉さんがバカなナンパ男をノックアウトしたらしいぞ」
そんな声が耳に飛び込んできた。
「なんだそりゃ？」
疑問詞は発しても、しかし、わざわざ見にいくほどの野次馬根性は持ち合わせていなかった。
こういうのってだいたいは誇張があるんだよな――
美人エッセイスト然り、マドンナ議員然り。
それから周はショッピングセンターに戻ってフードコートにどんな店があるのか見て回ったり、店舗をひやかしてみたりもしたが、それでつぶれた時間は2時間ちょっとだった。
「ひとりじゃこれが限界か」
駅周辺の散策という当初の目的は達成したので、これで帰ることに決めた。押しかけメイドのいる家へ。

ぎりぎり夕方と呼んでも差し支えなさそうな時間。
周はきた道を戻る。
行きにかかった時間が１０分なら、帰りも所要時間は１０分だ。
大きな変化はないし、一段増えていたりもしない。
マンションのエントランスを通って階段をのぼり、家へ辿り着く。
ドアを開けて、無言で中へ。スニーカーを脱ぎ散らかして玄関を上がったところで、奥のドアが開いた。
メイド服姿の月子が現れる。
「おかえりなさいませ、周様」
「……ああ」
月子の言葉に短く応えて、周は部屋へ入る。努めて彼女を見ないようにした。
財布と携帯電話をベッドの上に放り出してから、
「よし」
と、ひとつうなずく。
再び廊下に出れば、当然そこに月子の姿はもうなく、周はリビングへと這入った。
月子はキッチンに立っていた。夕食の準備だろうか。
「月子さん、あのさ――」
周もキッチンの側へ行く。
「ん？　……なんだ、これ？」
見つけたのはダイニングテーブルの上にあったビニールの何か。広げてみればそれはスーパーのレジ袋だった。丁寧に折りたたまれていたようだ。
「買いもの行ったんだ」
「ええ、周様がそこら辺をほっつき歩いている間に」
「……せめて散歩くらいに言ってくれ」
そこでふとあることに気づく。
「もしかしてその格好で行ったのか？」
その格好＝メイド服姿。

「まさか。私がそんな変人だとでも？」
「自分の職業に誇りはないのかよっ」
「ありますが、それとこれとは別です」
しれっとメイドさんは言ってのけた。
「ところで、何か話があったのではありませんか？」
「あ、あぁ、そうだった。えっと、なんだ、その……やっぱり出て行ってくれないか？　これじゃ何の意味も――」
「お断りします」
今度ははっきりきっぱり即答。
「親父の命令だからか？」
「いえ、それもありますが、労働条件がいいので」
「……」
「……」
「……金？」
「……そんなところです」
理由としては完全無欠。
正直、父親がごちゃごちゃ言っているだけなら、また力ずくでどうにかしようと思っていた。だが、月子の事情はまったく考えていなかった。
「周様が別のお仕事を紹介してくれますか？」
「あ、いや……」
「それともその分を周様が補填するとでも？」
「それは……」
「失業手当ては出ますか。夕食は筑前煮ですがよろしいですか。アホですか、周様は」
そして、なぜかここぞとばかりにたたみかけられる。
「……」
「……」
「……」
「えっと……、すいません」

謝る周。
アホでごめんなさい。
「周様、夕食はいつ頃で？」
「じゃあ、６時半」
「わかりました。では、そのように」
月子は再びキッチンへ向き直る。
周はその背中を見て、ひとまず引き下がることにした。
見事敗退。
背を向ける。
「周様」
足を踏み出しかけたところで声をかけられ、振り返った。
「暇そうなので下に降りて、夕刊を取ってきてください」
「るせぇ」
暇で悪かったな。
そう吐き捨てつつも、まっすぐ玄関に向かう周だった。

第3話　「すたっぷ」

そんなこんなで高校生活がはじまった。
初日は始業式とホームルームだけで早々に終了。
そして、本日が2日目。
「今日から月子さんも大学だっけ？」
朝、周は月子に訊いた。
ここは主にひとり暮らしや子どものいない世帯向けのマンション。よって、ダイニングキッチンもそれほど広くない。食べているのもスクランブルエッグやトーストときわめて庶民的だ。にも拘らず、脇に表面積の大きいエプロンドレスのメイドさんが控えている光景は、正直かなり異様だった。
「はい。受講する講義が正式に決まるのはもう少し先ですが、基本的に今日から講義がはじまります」
事務的な口調で答える無表情メイド月子さんは、この春から大学2年生である。
「ふうん。そっか……」
「何か？」
「いんにゃ。何でもね」
周は誤魔化すように応じた。
なかなか鋭い。
確かに周は返事をしながらちょっとばかり考えごとをしていた。それもよからぬこと……というほどでもないが、このメイドつきの生活から一時的に解放されるための策だ。月子には言えない種類のもの。
それが態度に表れて、月子が不審なものを感じ取ったのだろう。
「はい。ごっそーさん」
合掌。
周はあまり突っ込まれないうちに逃げることにした。

朝食を終え、ひと通り新聞にも目を通したところで家を出る時間がきて、周は立ち上がった。
「お待ちください、周様」
「ん？」
「これを持っていってください」
と、差し出されたのは直方体の構造物。
「なにこれ？」
「お弁当です。学生食堂では栄養が偏ってしまいます。これを持っていってください」
「わざわざ作ったの？」
「はい。わざわざ作りました」
「……」
どうにもひと言多いメイドだ。
「お気になさらずに。周様の食生活の管理も私の務めです」
月子はメイドの誇りをもってきっぱり言い切った。
そして、つけ加える。
「ま、私のを作るついでですけど」
ぼそっと。
「俺の方がおまけかよっ」
「加えて、中身も昨日の残りものです」
「なお悪いわっ！」
周が睨みつけると月子は、すっ、と目を逸らした。
「……」
「……」
都合が悪くなるとあからさまに目を逸らして誤魔化す月子さんだった。
ややあってからおもむろに、コホン、と咳払いをして、再び話し出すタイミングを計る。
「しかし、周様。周様の食生活をはじめとする健康管理のすべてを

私が任されているのも事実です。学生食堂のような大雑把なものを作るところに周様の毎日の昼食を預けるわけにはいきません。それなら私が作ります」
「でも、朝はただでさえ忙しいのに、この上また仕事を増やしたら大変だろ？」
遠回しに拒絶の意思を示す。これ以上自分の生活を侵食されては、ますます追い出しにくくなってしまう。
「かまいません。それもメイドの仕事です。……なお、拒否した場合、このお弁当はそのまま今晩の夕食となります」
「わかったよ！　持っていきゃいいんだろ！」
周は月子から弁当箱を奪い取ると、ドスドスと乱暴な歩調で玄関から出て行った。
「いってらっしゃいませ、周様。お気をつけて」
それを月子はいつものように深くお辞儀をして送り出した。

「よしっ、昼メシだぜ！」
４時間目終了のチャイムが鳴り終わると同時に叫んだのは、周の隣の席の岡本哲平だ。始業式翌日からさっそくはじまった６時間のフルコースに、授業中は死んだ魚のような目をしていたが、昼休み突入とともに息を吹き返したらしい。
「なに、鷹尾。弁当？」
鞄から弁当箱を取り出した周を見て岡本が問う。そういう彼はコンビニの袋に入ったパンやらサンドイッチやらが数点。
「あれ？　鷹尾ってひとり暮らしだーよな？　てーことは、自分で作ったわけ？」
「お、おう。まーな」
「家がお金持ちだから、毎日外食ができるくらい仕送りもらってるのかと思ったぜ」
「これが自立した生活ってものだ。これくらいは自分でやらないとな」

はっはー、と誤魔化し笑いがもれる。
まさか家を出たと思ったらメイドがついてきて、今は2ＬＤＫのマンションでメイドと一緒なんて口が裂けてもいえない。
「おお、おお。えらいえらい。そして、うらぁましいねぇ。……時に鷹尾、今度お前ンちに遊びにいっていーか？」
「絶対くんな」
即答。
躊躇なき返答。
これ以外の回答があろうか。
「何だよー。警戒心ゼロで人に見せられないものでも散らばってるのかよー」
ニヤニヤ笑いを顔に貼りつけながら、からかうように言う。だいたい考えていることは想像がつく。
「ま、まあ、そんなところだ」
たぶんメイドさんは人に見せられないものに分類されるだろう。
「お前さんって同じ男にも見せられない特異な趣味なわーけ？」
「……」
最悪、リアルメイドさんはそう取られかねない。
「しゃーない。またの機会にするとしよう」
そう言って諦めると、岡本の興味は昼食に向けられた。まずはパンの包装を勢いよく破いた。
さて自分も、と周も弁当箱を開けて、
「うおっ」
すぐに閉じた。
「お前さん、何やってんの？」
横から再び岡本。
「いや、まさかこんな弁当だとは予想だにしなくて……」
「自分で作ったんじゃなかったっけ？」
「あー、うん。実はな、朝起きたらもうできていたんだ」
これは本当の話。

「小人さんかよ」
「そうかもしれない」
「寝ぼけたまま作ってると、しまいによくわからない合体事故起こして、外道ができ上がるぞ」
「ま、そのへんは心配ないだろうな」
なにせ実際に作っているのは人間性に致命的な欠陥がボロボロ散見されるが、仕事は完璧なメイドさんなのだから。
改めて蓋を開ける。
そこに入っていたのは、これぞ弁当というようなごく普通の弁当だった。色とりどりのおかずが見た目にも楽しい。
勿論、昨日の残りものなどではないのだが、果たして周が気がついたかどうか。
「いただきます」
周は指に箸を挟んだまま合掌し、周は頭を垂れた。

そのまま何ごともなく放課後。
夕方。
周は帰り道を急いでいた。というのも――、
「やっぱせっかく家を出たんだから、ひとりの生活ってものを味わいたいよな」
そんな理由である。
要するに、周は親の目もなくなったことだし、ほどほどにだらけてみたいのだ。無論、月子が乗り込んできたことですでにひとり暮らしでも何でもなくなっているのだが、せめて彼女が大学から帰ってくるまでの間くらいは、と。
しかし――、
周が家に辿り着き、鍵穴にキィを差し込もうとしたとき、ガチャリ、とドアが中から開いた。
「お帰りなさいませ、周様」
「……」

すでにエプロンドレスに身を固め、戦闘準備を整えた月子だった。
「どうぞ」
「ああ、うん……」
気の抜けたような返事をして、促されるままに周は中に入った。
後から月子が続く。
「きょ、今日は早かったんだな」
「いえ、今日だけではありません。これからもずっと周様より先に帰ってきます。周様を見送り、出迎えるのも務めですから」
「あ、ああ、そう……」
この言葉が本当なら、周にひとり暮らしなどすでにありはしないことになる。
「それから、周様」
「うん？」
周は靴を脱ぎ、玄関を上がったところで振り返った。
その周に向かって、すっと月子は手を差し出す。
「鍵をお渡しください。主に鍵を持ち歩かせる真似はできません」
「いや、これは俺ので……」
「お渡しください」
「俺も持ってた方が……」
「ダメです」
「何かあったときのために……」
「出せ」
「……」
今回の最終進化形は命令形だった。
それでも周が渋っていると、月子は何も言わず手を引いた。理解して諦めてくれたのか――と思った次の瞬間、
「おぶ……っ」
周の喉に地獄突き（ヘルスタッブ）がクリーンヒットした。
そして、月子の手が再び差し出され、
くいくい

指を曲げて催促する。
ついに言葉もなくなったらしい。
「……はい」
「お預かり致します」
鍵は周から月子に渡り、一旦スカートのポケットに収まった。
何だかとても理不尽なものを感じながら、周は自室に入ろうとする。が、そこで月子の視線を感じた。
「何？　まだなんかあんの？」
「周様は使ったお弁当箱を明日まで放置するつもりですか？　鞄の中で大惨事になりますよ」
「ああ、そうだった。……はいよ」
すっかり失念していた周は鞄を開け、弁当箱を取り出した。
月子に手渡す。
「じゃ」
と、自室のドアノブに手をかけるが、そこでまた視線を感じた。
振り返ると月子が弁当箱を受け取った構造のままで、何か訴えかけるようにじっと周を見つめていた。
「……」
じー。
「……」
じーー。
「……」
じーーー。
「じー」
ついに口で言った。
「な、なに……？」
「いいえ。何でもありません」
しれっと言って、月子は視線を外した。くるりと振り返ってリビングの方へ戻っていく。リビングを通ってキッチンへ向かうのだろう。

わけがわからずたじろぎまくっていた周はほっと胸を撫で下ろした。
「あ、月子さん。晩メシ、いつ？　腹が減ってて、早く食べたいんだけど？」
「いえ。申し訳ありませんが、あと3時間ほどお待ちください」
「……はい？」
今から3時間といえば、いつもの夕食の時間を遥かに越えている。というか、なぜ3時間もかかるのか。
「これから作ります。喜んでください。周様のお好きなおでんです」
「お、おでんはいいけどさ。だったらもっと早く作っとこうよ」
「たった今決めましたので」
薄氷の如き冷たさで月子は告げる。
「それくらいお腹をすかせれば、食べたときに感想のひと言くらい出てくるのではないかと」
もはや問答無用と背中で語りながら、月子はキッチンに消えていった。

第４話　「帰宅ボイコット」

今日も一日がはじまる。
「朝です。起床してください」
「うわあっ！」
鷹尾周（たかお・あまね）の一日は、端正ながら無表情なメイドに問答無用で布団を引っ剥がされるところからはじまる。
ベッドの上で掛け布団に包まるようにして寝ていた周は、一回転して悲鳴を上げた。
「あー、もう朝か……」
「おはようございます、周様。朝食の準備ができています。着替えて顔を洗って、十分以内にきてください」
もの凄い力技で現実に引き戻されて呆ける周に、メイドはメイドとしてどこか間違っている態度で、感情を挟まずに言った。
このメイドは、名を藤堂月子（とうどう・つきこ）という。現在病院で療養中の旦那様――要するに周の父親、から勅命を受けてここにいる。おかげで周が家を飛び出してまで望んだ、自立した生活は実現せず、代わりに２ＬＤＫメイド付きという世にも奇妙な生活スタイルが誕生した。
「……ん。わーった」
その返事を聞いて、月子は部屋から出ていった。
周は再び眠りに淵に落ちて、
二度寝。
……。
……。
……。
そして、きっかり１０分後――
音もなく部屋のドアが開き、月子が戻ってきた。ベッドの傍まで歩み寄ると、穏やかな顔で幸せそうに寝入っている周を見下ろした。
見つめること十数秒。

やがてベッドの手前の端に片足をかけた。手は対岸の端に。そうしてから――
「ふっ」
呼気を吐くとともに体重移動。
軽い！　丈夫！　が売りのスチール製のベッドは見事に横転し、
「どわーっ」
周が転がり落ちた。
「何だあ！　何が起きたあっ！？」
「おはようございます、周様。朝食の準備ができています。着替えて顔を洗って、十分以内にきてください」
しかし、この世の終わりかと思うほど驚く周に対し、月子は何ごともなかったかのように言った。
実際、１０分前と台詞が一言一句同じな辺り、本当に何もなかったことにして再スタートするつもりらしい。
「わ、わかった。すぐ行く」
周は横転したベッドと月子を交互に見て、怯えたように答えた。これでもう一回寝ようものなら、今度はきっと自分とベッドの位置が入れ替わるに違いない。
「お待ちしております」
軽く一礼して言ったその言葉は、脅しにも似た響きがあった。

「ったく。もうちょっとマシな起こし方はできないのかよ」
時間をおくと怒りが湧いてきたようで、周は朝食を食べながらぼやいた。長めの髪の下にある切れ長の目で月子をやぶ睨み。特別ハンサムというわけではないが、よく見れば意外に整った容姿をしていることがわかる。
「二度寝する周様が悪いかと」
「だからつってあんなことするかよ」
あんなこと＝ベッドひっくり返し。
普通はしない。

普通じゃなければするかもしれないが。
「次からまともな起こし方をしてくれ。でなきゃ出ていってくれ」
「回答を保留します」
「なぜに！？」
「いえ、基本どっちも嫌ですので」
つまり、出ていくのも嫌なら、これからもベッドをひっくり返すぞ、と。
「では、周様は、明日からは自力で起きるとでも？」
月子は決断を迫るように問う。
「お、おう。任せろ。それくらいやってやる。……自信ないけどな」
「わかりました。明日からはそのように。ただし、起きられなかった場合は今日以上の目に遭ってもらいます」
「結局くるのかよっ」
それよりなにより、まだ上のコースが用意されているのが恐ろしい。
「そこまでいくと、趣味でやってんじゃないかと思えてくるな、おい」
「……」
押し黙るメイドさん。
「……」
「……」
「……」
「……オイ」
周が月子を見上げると、彼女はすっと目を逸らした。
再度沈黙。
程なく月子は、気を取り直したように周に向き直り、
「もうよろしいのでしたら下げますが」
「まだ喰うっ。半分以上残っとるわ！」
朝食を終えた周は、部屋に戻るとすぐに制服に着替え、鞄を持っ

て廊下へ出た。
「周様、もうお出かけですか？」
月子がリビングから出てくる。
「ああ」
「いつもより早いのでは？」
「早く行きたいんだよ」
やや乱暴な口調で答えた。
確かに普段から月子が余裕を持って起こしてくれるおかげで、毎朝登校前に新聞の朝刊に目を通すくらいのことはしている。
「では、これを」
差し出してきたのはいつもの弁当だった。
「……」
周はそれを見てわずかに逡巡した。
ここでこれを突っ撥ねるのは簡単だろう。だが、その後のことを考えてしまうのが周という人間である。月子が少なからずの手間をかけて作った弁当は、自分が食べないとどうなってしまうのだろうか、と。……まぁ、本当に今夜の夕食に出される可能性もあるが。
「……ん」
不承不承、周はそれを受け取り、鞄に放り込んだ。
そうしながら足を靴に突っ込み、外へ出た。
「いってらっしゃいませ、周様。お気をつけて」
月子はいつも通り丁寧にお辞儀をして送り出してくれた。

高校の授業のペースにもすっかり慣れ、本日も6時間すべてがつつがなく終了。
そして、放課後。
周は駅前のショッピングセンターの中にある、ワンフロアの半分ほどを占めるアミューズメントスペースにきていた。
寄り道の道連れはクラスメイトふたり。
ひとりは教室の隣人、岡本哲平。

もうひとりは、名を天根小次郎という。彼とは名前に同じ『あまね』の音を持つ縁で仲がよくなった。
「うおりゃあっ」
周は今、パンチの威力を測定するパンチングマシーンのターゲットを殴りつけていた。
「なんだか荒れとらーなー」
「……別に」
端で見ていた岡本のひと言に、周は素っ気なく答えた。
荒れていることはちゃんと自覚していた。だが、その荒っぽいパンチのわりには威力を示す数字がいつもより出ていない。力まかせに腕を振っているから、インパクトが不的確なのだろう。
「ちっ」
終わってみれば表示された合計と平均は散々なもので、周は思わず舌打ちしていた。
「小次郎さんよ」
床に置いていた鞄を拾い上げ、友人に向き直る。
「なんかできる対戦ゲーある？」
「いくつかな」
「おっし。じゃあ、やろうぜ」
さっそく対戦台の並ぶ一角に足を向ける。その後を小次郎も黙ってついていった。口数は少ないが、ノリとつき合いは悪くないのが彼の人となりである。
それから3人でいくつかの筐体を渡り歩き、ほどほどに遊んだところで外に出た。
陽はすっかり暮れていた。
4月といえば春真っ只中だが、日が長くなるのはもう少し先だろう。
「そろそろ帰るか」
「だーな」
そう言ったのは小次郎と岡本。まっとうな感覚である。

そして、周はというと、
「帰りたくねぇ……」
だった。
「お前は子どもか」
「んだよ」
「だって鷹尾、ひとり暮らしだーろ？　なのに帰りたくないって、コレでも出るの？」
岡本は胸の前で両手を垂らす。古典的な幽霊のポーズだ。
「そんなんじゃねぇけどさ」
メイドが家に取り憑いているのだ。
これが本当に幽霊なら、むしろ逆に笑えたかもしれない。日本なのにメイド姿の幽霊。しかも、炊事に洗濯、掃除と、家事までやってくれるのだ。十二分に笑いの域である。
「俺たちは帰るけんど、鷹尾、どーする？」
「少しくらいならつき合ってやれんこともないが」
「ああ、いいよいいよ。俺もテキトーに帰るからさ」
周は掌をひらひらさせながら答えた。
「そうか、じゃーな」
「また明日」
「おう」
別れの挨拶を交わした後、岡本と小次郎は駅へと歩いていく。電車通学なのだ。
それを見送ってから周は家へ――ではなく、再びショッピングセンターへと戻り、フードコートでファーストフードを注文した。
「あんな家に帰ってられるか……」
ぼやきながらハンバーガにかぶりつく。
周はこういうジャンクフードが好きだった。だからと言って、今まで好きなだけ食べてきたかというとそうでもなく、むしろ一般的な家庭の子どもよりその機会は少なかったと言える。家が裕福な上、両親の愛情過多のせいで食生活には恵まれていたが、逆にこういう

高カロリィ低コストなお手軽ジャンクフードには縁がなかったのだ。
が、その好きなものを食べる手がはたと止まる。
「何やってんだろうな……」
周はつぶやく。
何をやっているのか？
平たく言えば、帰宅ボイコット。
表情ひとつ変えずベッドを横転させるような、あんな乱暴な押しかけメイドのいる家なんかに帰ってられるか、と只今抗議行動中なのである。
だが、こうしてひとりになって落ち着いて考えてみれば、どうにも虚しい。
少なくとも、好きな食べものを食べているはずなのに、それを素直に美味しいと思えないほどには虚しかった。

で。
「結局は帰るしかないんだよなぁ」
あれから本屋やＣＤショップに寄ったりして時間をつぶしていたが、それも飲食店以外の店舗が閉まりはじめた午後８時で音を上げた。
夜道を歩いて家へと帰る。
普段なら１０分の行程を、たっぷり１５分はかけて歩いた。
ドアの前に立ったとき、鍵がかかっていたらどうしようかと思ったが、その心配をよそにドアノブはすんなりと回った。
いつもより静かにドアを開閉し、やはり静かに玄関を上がる。
にも拘らず、廊下の突き当たりのドアから月子が姿を現した。このメイドさん、１００メートル先で針が落ちた音でも聞き取るかもしれない。
「おかえりなさいませ、周様」
月子は恭しく頭を下げ、周を迎える。
対して周は、エセ空手のポーズで身構える。

「……」
「……」
そして、沈黙。
日頃から表情の乏しいメイドさんはこれくらいでは動じず、緊張に耐え切れなくなって先に言葉を発したのは周のほうだった。
「えっと、月子さん、怒らないの……？」
「は？　なぜでしょう？」
「いや、だって、こんなに遅く帰ってきたしさ……」
だが、
「周様がいつ帰ってきてもいいようにしておくのが、メイドの仕事ですから」
月子はきっぱりと言い切った。
「あ、あー、そう……」
周は頭を掻く。
なんだがボイコットをしていた自分がバカらしくなってきた。なんて無意味なことをしていたのだろう。改めて思う。
「では、夕食の準備ができていますので」
「……」
うっぷ。
押し寄せてきた吐き気と後悔を、顔に出さないように懸命に堪えた。
「わ、わかった……」
辛うじてそれだけを言い、部屋に入ろうとして――その足を止めた。
「あ……っと、月子さん」
「はい？」
月子のほうもリビングに戻る途中だった。
「その……、ごめん」
「は？」
「いや、だから、遅くなってゴメン。次から帰りが遅くなるときは

連絡する。……じゃ、それだけだから」
すちゃっと片手を上げ、逃げるように部屋に戻ろうとする。
「では、私のほうからもひとつ」
と、今度は月子。
「夕食ですが、無理をしなくてもかまいませんが？」
「……」
どうにも見抜かれてるっぽい。
そして、それは魅力的な誘いでもあった。
「い、いや、大丈夫。喰う」
それでも意地を貫き通す。
「わかりました。では、そのように」
月子がかすかに笑っていた。

第5話　「生徒会長、菜々ちゃん」

朝――、
「今日は速やかに食事をすませて登校してください」
ダイニングのテーブルについた周に、メイドは告げた。
「なに？　今日はやけに急かすな」
「私が私用でいつもより早く大学に行かなくてはなりませんので」
「あー、だったら鍵貸してくれ。俺が閉めて出るからさ」
「お断りします。主人に鍵を持たすようなメイド失格な真似はできませんので」
「……あそう」
ぴしゃりと言い切った月子に、周は諦め気味に応えた。ここ数日、何回か同じことを言ったが悉く一蹴されているので、もとよりダメ元だったのだ。
「自分の都合に主人を巻き込むのはメイド失格じゃないのだろうか……」
「何か言いましたか？」
「うんにゃ。なにも」
周はきっぱりと否定し、朝食に手をつけた。
「……早く出て行け」
月子がぼそりとつぶやいた。小声ながら周には聞こえる音量で明晰に発音する辺りに大きな悪意を感じる。
周が顔を上げて月子を見ると、彼女はすっと視線を逸らした。
いつも思うが、これほど白々しい誤魔化し方も珍しい。
「……」
「……」
こほん、と月子が咳払いをした。
「尚、いつも通り先に帰ってきてお待ちしていますので、心配は無用です」

「心配してねぇし聞いてもねぇよっ」

学校に着いた周はいつものように昇降口で上履きに履き替えた。踵を踏んだままで教室に向かおうとしたところで、

「何だあ？」

廊下がやけに騒がしかった。

「なんか文句あんのかよっ！」

「因縁つけてきたのはそっちだろうがっ！」

怒声が聞こえる。

「ああ、ケンカやってるみてーだな」

言ったのは後ろからやってきたクラスメイトの岡本だった。

「この護星高校ってさ、運動系のクラブはどこも強いんだけど、その分、血の気が多くて喧嘩っ早い奴も多いんだってよ」

「マジ？」

「同じ中学だった先輩もここにいてさ、そう聞いてる。今日もおおかた仲の悪いクラブ同士が衝突したんじゃねーかな？　……あ、殴り合いはじめた……」

「お、おい。止めなくていいのか？」

睨み合い掴み合い程度ならまだしも、さすがに手を出すのはマズかろうと思う。

「でも、あれって柔道部とレスリング部だーぜ？　どっち止める、つーか、どうやって止めるよ？」

「……それ、ほっといたら寝技主体にならないか？」

実現すれば迫力に欠ける戦いである。

とは言え、どちらも格闘技には変わりない。どう転んでも無傷ではすみそうにない。ついでに、下手に止めに入ってもやはり無事ではすまないだろう。

と、そのとき――、

「はいはーい、ちょっとどいてー。どいてねー。こらーっ。とっとと道あけろー」

後ろからやたらと元気の良さそうな女の子の声が聞こえてきた。
周が振り返ると野次馬の群れが左右に割れていっていた。何が起きているのかわからないが、周と岡本も廊下の端に寄る。
そのモーゼの十戒の如く開かれた道の真ん中に現れたのは、小柄な女子生徒だった。横にはお供のようにして眼鏡の女の子もいる。
おそらくこの学校の生徒で誰よりも小さいのではないだろうかと思う身体に、長い髪。それにひと目見て素直にかわいいと言える容姿だ。しかし、何よりも特徴的なのは制服のスカートの下に穿いている黒いスパッツと、手にはめている指先のないドライバーズグローブのような手袋だった。
周は岡本の顔を寄せて訊いた。
「おい、岡本。あの小っさい……もがっ」
が、途中で口をふさがれた。
耳ざとくその声を拾ったのか、ぎろ、と女の子が大きな瞳で鋭く睨んできた。
「な、なんでもねーです、はい」
周の口に蓋をしたまま岡本が慌てて答えた。
ふん、と鼻を鳴らし女の子は視線を前に戻した。その先ではまだ喧嘩が続いている。
「ぷはあっ。……何すんだよ!?」
解放された周は、新鮮な空気を肺いっぱいに吸い込んだ。
「つーか、あれ誰だよ?」
「菜々ちゃんだ」
どこか畏敬の念を含んだ声で岡本は言う。
「菜々ちゃん〜?」
「そう。生徒会長の竜胆寺菜々（りんどうじ・なな）ちゃんだ」
ということは、生徒会長が直々にこの騒ぎを収めにきたのだろうか。
「会長、あれです」
「ん、わかった。あとは任せて」

一緒にきたおつきの眼鏡の子とそんなやり取りが交わされる。
やはりそうらしい。
しかし、次の瞬間、生徒会長は地を蹴り、喧嘩をしているふたりに向かって駆け出していた。
充分な助走をつけて、跳躍。
直後、手前にいた生徒の背中に力いっぱい飛び蹴りを喰らわせた。
ふたりまとめてゴミ屑のように吹っ飛んでいく。
「……」
予想もしなかった展開に唖然とする周。
「生徒会執行部治安維持隊よっ。かかってきなさい！」
「……」
普通は『おとなしくしなさい』ではないのか。
「おい、岡本。もう一回訊く。あれは何だ？」
「生徒会の菜々ちゃん会長だーな」
「治安維持隊とか何とか言ってたぞ」
その名称とやっていることに大きな差異があるが、今は論じないことにする。世界各地に紛争をばら撒いているようにしか見えない大国の例もあることだし。
「会長と治安維持隊隊長との兼任。というか、ただ単に会長が趣味と実益を兼ねてやっているらしい」
「趣味と実益、ねぇ……」
いったいどんな趣味なのか。
しかし、あんな極小サイズの女の子に治安維持隊などというものが務まるのだろうか、と周は首を傾げる。
「く、くそ……」
「いきなり出てきて舐めたことしやがって」
喧嘩をしていた男子生徒ふたりがふらふら立ち上がった。
「む。まだ立つか。……よし、とりあえず、殺っておこう」
菜々ちゃんは決心したように言うと、つかつかと歩いてふたりに向かっていった。

その後も一方的だった。
ひとりは足技のコンビネーションで連打を喰らい、もうひとりも蹴りではあるが突き刺すような超一撃を腹に受け、ともに昏倒した。
運動部員連合が床に倒れて沈黙すると、一瞬遅れて周囲から、おお〜、と歓声が上がった。
「や、ども。ども」
両手を挙げて応える菜々ちゃん。いったい何のイベントなのか。
「で、これ誰？　え、柔道部とレスリング部？　ふうん、誰かこのふたりの知り合い、いる？」
周りにいた生徒の中からちらほらと手が挙がる。
「責任持って生徒指導室に運んどいて。よろしくっ。……じゃ、あたしはこれでっ」
そう言って挨拶代わりに軽く片手を上げると、生徒会長・竜胆寺菜々ちゃんは楽しげに足取りも軽く去っていった。
「……」
呆然とそれを見送る周。
ただ、すれ違いざま、菜々ちゃんが周を見た気がした。

その放課後――、
終礼を終えて帰宅しようと周が昇降口を出ると、
「よーーやく出てきたわね、鷹尾周っ」
「は？」
いきなり聞こえてきた女の子の声。周は辺りを見回した。が、その発生源が見当たらない。因みに声の主には、確信はないもののだいたい見当はついていた。
やがて誰かが「おい、あれあれ」と斜め上を指さして、周もその先を見た。
「げ」
校門の門柱の上に生徒会長・竜胆寺菜々ちゃんその人が立っていた。

この護星高校の敷地を囲む壁は、思わず「ここは刑務所かよ」とつぶやいてしまうほど高い。その一部でもあるバベルの塔みたいな門柱に立っている姿は、見ているだけで寒気がする。
「な、何やってんだ……」
「先に帰られたらマズいから授業が終わってすぐきたっていうのに、あんたがなかなか出てこないから通る子通る子に『会長、危ないぞー』とか『菜々ちゃん、いい子だから下りといでー』とか、いろいろ心配されたじゃないのっ」
そりゃ当然だろう。
周も似たようなことを言いたくて仕方がない。そして、ついでになぜそんなところで待つ必要があるのかとか、直接教室にきたらダメなのかとか、疑問がいくつかあるわけだが――、
「とうっ」
「い゛ぃ!?」
いきなり菜々ちゃんが門柱から跳んだ。
思わず周の口から悲鳴にも似たものが絞り出される。
しかし、菜々ちゃんは軽やかに着地すると、その衝撃も膝を曲げて殺した。
「……」
「……」
が、そのままなかなか立たない。
けっこう痛かったのかもしれない。よく見ればその顔は、何かに耐えているように見えなくもない。
にしても、あの高さから飛び降りられるというのはどういう身体能力なのか。
「ふんっ」
己を鼓舞するようにして菜々ちゃんが立ち上がる。
その頭は周の胸の高さにあった。おそらく全校生徒でいちばん低いのではないかと思われる。
「鷹尾周よね」

不敵な笑みで見上げてくる。
「そ、そうですけど。何で俺の名前を？」
「うん。昼休みに学校のデータベースに入って調べた。『周』って書いて『あまね』って読むのね。初めて知ったわ」
「は、はぁ。……それで俺に何か用でしょうか？」
周としては生徒会長に直々会いにこられるような覚えがない上、今朝、菜々ちゃんのデタラメな強さを目の当たりにしたばかりなので、身が竦む思いだった。
菜々ちゃんはおもむろに周に指を突きつけ、
「朝、あたしのことちびっ子って言ったわねっ」
「言ってねぇよ！」
いきなり身に覚えのない罪状を叩きつけられる。
尤も、似たようなことを言いかけて途中で遮られてはいるが。
「なに、あいつ、菜々ちゃんにそんなこと言ったの？」
「うわ、命知らずっ」
「知らね。俺、知らね」
下校する生徒の何人かがふたりを横目に見ながら、そんなことを言って通り過ぎていく。
「……え。い、いや、ちょっと待……っ」
すでに半ば事実にされつつあるらしい。
「あたしにそんなことを言う奴は――制裁ね」
「俺の否認発言は無視かよ！」
加えて刑も執行直前だ。
と――、
「菜々ちゃん、お疲れー。帰りに溝に嵌まるなよー」
「会長、さよならー。今日は風が強いから飛ばされないようにねー」
挨拶をして通り過ぎていく生徒たち。
「んー。みんなも気をつけて帰りなさいねー」
そして、朗らかに応じる菜々ちゃん。
心和む下校風景だ。

「ちょっと待てぇ！　今のだって暗に小さいって言ってるようなものじゃ――」
「いい度胸ね。面と向かって言うとは……」
菜々ちゃんは口の端を吊り上げて笑いながら、両の拳を打ち合わせた。手にはすでに手袋がはめられている。
戦闘準備は万端だ。
周の頭に今朝見た柔道部とレスリング部の末路がよぎった。
が――、
次の瞬間、ふわりと菜々ちゃんの身体が浮いた。
「……」
「……む？」
菜々ちゃんの頭の上にクエスチョンマークが浮かぶ。
何が起きたのかと思えば、いつの間にか忍び寄っていた男子生徒が、ネコでも扱うかのように襟を持って摘み上げていたのだった。
「……」
その男子生徒は平凡な中肉中背ながら隙がなく、何か見えない刃物でも隠し持っているような鋭い雰囲気をまとっていた。
彼は自分が摘み上げたものを呆れたように見つめる。
「だ、誰！？　こんなことをするのはっ」
「……会長、何を遊んでるんですか？」
男子生徒がようやく口を開いた。
「あ、九条！　この雑用！　放しなさい。下ろしなさいよーっ」
「その雑用としては、副会長に会長を連れてこいって頼まれてるんですよ」
九条と呼ばれた生徒は子どもをあしらうように言った。
それから周へと顔を向ける。
「あー、悪かったな。うちのちびっ子が迷惑をかけたみたいで」
「あ、いえ……」
できればちゃんと繋いでおいてほしいと思う周だった。
「こらー、誰がちびっ子だー」

と吊るされたままバタバタと暴れるちびっ子生徒会長。
「あんただ、あんた。だいたいこんなところで何をやってるんです？　放課後は裏山の掃除にいくとか言ってませんでした？」
「そ、それは……」
「ま、いいですけどね。呼びにいく手間が省けたので」
さっくりそう言って九条は菜々ちゃんを連れていく。
「せめて下ろせっ」
「下ろすと逃げる」
「……むぅ」
そんなやり取りをする声とともに、ふたりの姿が遠ざかっていく。
そして、取り残された周。
いつの間にか事態は収束したらしい。
基本的に何もしていない周だったが、わけのわからない疲れはあった。

第6話　「アクシデント続発！？」（1）

「朝です、周様。起きてください」
その日の朝はいつもと違っていた。
メイドである月子の言葉は、内容や調子など、どれをとってもいつもと変わらない。無表情だ。しかし、今日の月子はいきなりノックもなく周の部屋の扉を開けた。
「……ん。わかった。十分したら行くよ」
「ダメです。直ちに起きてください」
そして、いつもなら与える猶予をまったく与えなかった。
そんな月子の様子に違和感を感じ取ったのか、布団の中で煩わしそうに身をよじっていた周は、ぴたりとその動きを止めた。
「5秒以内に起きていただけない場合は最終手段に出ます。3・2・1……では、実行します」
「早ぇよっ」
周が飛び起きた。
「最終手段に訴えるのも早けりゃ、カウントも速ぇよ！　あと、なんで3から数えてんだよ！」
「……」
月子が視線を逸らす。かすかに舌打ちが聞こえた気がした。細かいところに突っ込んでくる周がうるさいと思ったのか、それとも最終手段とやらに出られなかったのが残念だったのか。
「で、なんでそんなに急かすのさ」
「まことに申し上げにくいのですが……」
と、月子はいつもの調子で言う。
「つい先ほど8時を回りました」
「……は？」
8時というと、朝のホームルームがはじまる30分前である。
マジで遅刻する30分前。

「なんでそんなことになってんだよ！？」
「朝、私が起きたら時計がいつもより早く進んでいたのです」
「寝過ごしてんだよ！」
「そうとも言います」
月子はまことに申し上げにくくなさそうに返した。
「ああ、もういい！　今日は朝食抜きだ！」
「それがよろしいかと」
言って一歩下がった。
そうして踵を返しかけた月子を見て、周はあることに気づいた。
「月子さんはこんなときでもちゃんとメイド服を着てるのな」
「メイドの正装ですので」
「因みに、それ着るのにどれくらいかかる？」
ロングスカートのエプロンドレスは着るのになかなかの手間がかかりそうだ。
「今日は急ぎましたので、起床からその他の身支度を含めて２０分くらいかと」
「先に起こせよっ」
月子の言葉が本当なら、効率次第ではもう２０分の余裕が生まれてことになる。
メイドはしばし考え込み――、
「では、次はそのように」
「そんな『次』はいらん！」
時間に余裕がないように、周の心からも余裕が消えているようだ。かなりキレやすくなっている。
月子はむっとした様子で周から顔を背けた。心なしかその頬が少し膨らんでいるようにも見える。
やがてぽつりとひと言。
「……シュウ、うるさい」
小さいながら明晰なその声は周の耳にもしっかりと届いた。というか、わざと聞こえるように言っている節すらある。

そして、周が呆気にとられている隙に、月子は一礼して部屋から退出した。

周が大慌てで着替えをすませ、ダイニングキッチンに顔を出したのは、それから5分後のことだった。

「もう出るから」

それだけを告げてUターンする。

「お待ちください、周様」

「ん？」

この忙しいときになんだと思いながら振り返ると、そこに月子が立っていた。手に持った小皿の上には形のいいおにぎりが乗っていた。

「せめてこれだけでも」

周が部屋から出てくるまでの短い間に用意したらしい。

「助かる」

そう言うと周はそれをつまみ上げ、口の中に丸ごと放り込んだ。そうして玄関に向かう。後ろに月子も続いた。

玄関で学校指定の革靴を履き終えると同時に、口の中のおにぎりを飲み込んだ。

「どうぞ」

絶妙のタイミングでお茶を差し出す。

周はそれを受け取り、一気の飲み干した。

「んじゃっ」

「いってらっしゃいませ。お気をつけて」

丁寧なお辞儀でメイドは主人を見送った。

学校までの道のりを、周は走った。

状況は、力の続く限り全力疾走して間に合うかどうかギリギリといったところか。学校に程よく近いマンションを選んでおいてよかったと思う。

それにしても、いつもは周りに鬱陶しいほどいる制服姿がひとつもないというのは、不安を煽るものがある。実はどうしようもないほど遅刻なのではないかと疑ってしまう。
そんな肉体的にも精神的にも苦境に立たされている周の横を、
ビュゥン……――
レーシングカーが通り過ぎるときに似た音を鳴らしながら、何かが駆け抜けていった。
「……」
一瞬のことで視認できなかった。
そそ何ものかはすでに次の角を曲がっていて、もう後姿すらも確認できない。
ただ、人外のスピードで駆け抜けていったことだけはわかった。その煽りを喰らって周の髪が、しばらくの間、後ろから前へなびいたくらいである。
「何だぁ、今のは？　やたら小っこい、改造チョロQみたいなのが走っていったような……」
それにしては痕跡がまったくない。
「錯覚、か……？」
その可能性も充分にある。
証明する材料が五感のいくつかで感じたものだけというなら、これほど曖昧なものはない。
周も次の角を曲がった。
別に後を追おうとしたわけではなく、ただ単に学校への最短コースがそこだっただけのことである。
と――、
「誰がちびっ子よ！？」
「おわあっ！」
角で待ち受けていたのは、周の通う護星高校の制服にスパッツ穿き、遠近感を無視したスモールサイズの女の子。
生徒会会長兼治安維持部隊隊長、竜胆寺菜々ちゃんその人だった。

「な、菜々ちゃん会長……なんでここに……？」
「なんでって、決まってるでしょっ。そりゃあ……あっ、遅刻だったぁ！」
言うが早く、菜々ちゃんは脅威のロケットスタートで駆け出していた。ただでさえ小さい身体がさらに小さくなっていく。
まさにチョロQのスタートだ。
「……」
そして、ひとり残され、立ち尽くす周。
何もかもがおいてけぼりだ。
「しまった。俺もこんなことしてる場合じゃなかった」
やがて周も自分のおかれている状況を思い出し、再び走り出した。
しばらくすると前方に足踏みしながら待っている菜々ちゃんの姿が見えてきて、そのまま合流、併走する。
「ちょっとぉ、遅いわよ」
「いや、俺、これでも全力疾走なんですけど……」
一方の菜々ちゃんはかなり余裕がある様子だ。
「会長が速すぎなんですよ」
「まっかせなさーい！　あたし、この前、非公式ながら女子１００メートルの日本タイ記録、弾き出したわ」
あっはっはー、と楽しげに笑う菜々ちゃん。
反対に周はどう反応していいかわからない、とても複雑な表情だったが。
「それなのに九条ったら『それ以前に、会長は人間として非公認です』とか言うのよ」
「九条……」
ああ、と周は思い出した。
先日会った鋭いナイフみたいな雰囲気の先輩がそんな名前だったと記憶している。確か雑用とか呼ばれていた。
「うまいこと言うわ」
「うまいのかよっ」

しかし、菜々ちゃんの規格外の身体能力を見れば、その意見も尤もだろうとは思う。
「でも、人間凶器に言われちゃおしまいよね」
「に、人間凶器……！？」
もう何だかわけのわからない話になってきている。
このままだとどうやっても噛み合う話はできそうもないので、周は自分から話を切り出してみる。
「菜々ちゃん会長も遅刻するんですね。生徒会長なのに」
「生徒会長といえども人間よ。遅刻もするわ」
と、つい先ほど人間というカテゴリからカミングアウトしたばかりの存在が言う。こういう部分だけは人並み、というか、並み以下なのだろう。よくできている。
「生徒会の人間だからって生徒の模範みたいなのばかりだと思ったら大間違いよ。爆発物のスペシャリストとか病弱薄幸ハッカー少女とか、いろいろいるんだから」
「……」
そして、そのボスが菜々ちゃんである。
周は軽い眩暈を覚えた。
それはもう生徒会ではなく、単なる危険集団ではなかろうか。それか奇人変人博覧会。いったいどこまでが本当でどこからが冗談なのか。
「あ、マズッ！　このままじゃ遅刻する。鷹尾、行くわよ！」
「へ？　行くって……うわたっ！」
次の瞬間、菜々ちゃんは周の手を掴み、今までセーブしていたであろうパワーを全力開放して駆け出した。
周の身体が引っ張られ、今まで出したこともないようなスピードを強いられる。
「ちょっ、ちょっと待っ……。む、無理、無理す！　足っ、足がついていかな……」
「耐えなさい。耐えるのよ、鷹尾！　陸上部は毎日こういう修行を

してるわ！」
聞く耳持たず、菜々ちゃんはお構いなしに牽引していく。
「俺は普通の生徒だー！　あと、修行じゃなくて練習……うひぃ～！」
で、結局、
周は校門が閉まる寸前に菜々ちゃんにゴミのように投げ込まれてセーフ。菜々ちゃんの方は閉まった門を飛び越えてむりやりセーフを勝ち取った。

〃　「アクシデント続発！？」（2）

その日の夕方はいつもと違っていた。
学校から帰ってきた周はいつもと変わらない。しかし、確かに何かが違っていた。
「……」
例えば、頼んでもいないのに毎日コピィ＆ペーストしたように出迎えてくれるメイドの姿がなかった。
「まだ帰ってきてないのか？」
それにしては玄関の鍵が開いていた。
どこか近くにちょっとした用で出かけているとか。そもそも、朝、月子が鍵をかけ忘れて出かけたとか。いろいろ考えてもみるが、なにぶん初めてのことなのでどれも正解のような気がしない。
と、そのとき、電話が鳴った。
すぐ真横にいた周は、1コールも鳴り終わらないうちに受話器を手に取った。
「はい、鷹尾――」
「あーら、お坊ちゃま！　わたしですよ！　藤堂です！」
周の声を遮り、特大ボリュームの声が返ってきた。そばに誰かいたなら、その声の一言一句まではっきりと聞き取れたに違いない。
周は一度耳から離した受話器を再び近づけた。
「や、やあ、藤堂さん。どうしたの？」
月子の母親である藤堂は、周の実家の家政婦である。程よく恰幅が良くて、妙に頼もしい感じの人物だ。周が生まれる前から屋敷にいて、何かと世話を焼いてくれた。欲するところも欲しないところも、いろいろ施してくれたものだった。
「うちの月子はいますかね？　ご迷惑かと思いながらも、娘に急用があって電話した次第なんですよ」
何が可笑しいのか藤堂は豪快に笑う。

「月子さんね……」
と、周は廊下の先、リビングの入り口に目を向けた。やはり人の気配はない。
「どうも今いないみたいなんだよ」
「んまぁー、なんてことでしょう！」
再びボリュームマックスの甲高い声が周の耳を貫いた。
「主人を放り出してメイドがどこをほっつき歩いているのでしょう！　一度言ってやらないといけませんね！　お坊ちゃまからも叱ってやってくださいまし！」
「そ、そのうちにね……」
周が月子を叱る？　そんなことをしたら様々な不幸に見舞われるような気がしてならない。朝起こされるとき最初から最終手段に出られるとか、そんな感じの。
結局、藤堂へ連絡を入れるように周の口から月子に伝えることで話がまとまり、電話を切った。
藤堂はああいう豪快な人柄だが、月子を本当に大事にしている。月子がひとり娘で、しかも、母子家庭となればそれも当然だろう。
周は自室に鞄だけ放り込むと、そのまま廊下を抜けてリビングに踏み入った。
リビングに、
ダイニングキッチン。
どこにも月子の姿はない。
「……」
ただ、月子の私室のドアだけが鎖されていた。
とは言っても、基本的にそのドアはいつも閉まっている。開けっ放しにしておくと、リビングにいる人間から中が丸見えになってしまうのだ。よって、月子がどこにいようと閉まっているのが常である。
周は試しにそこを開けてみた。
月子が、いた。

周は考える。月子はきっと何かしらの理由で、周より少し前に帰ってきたのだろう。だからまだ部屋にいたのだ。電話が鳴ったときもすぐに周が取ってしまったから、月子の耳に届かなかったのだ。
そう考えれば辻褄は合う。
が、それは兎も角。
月子は着替えの最中だった。
「シュ……ッ」
「つ……っ」
ふたりして息を飲む。
ピュアホワイトの、ブラとショーツ、ガーターベルトにストッキングといった刺激的な姿。
いちばんに目がいったのは、その胸だった。普段のメイド服姿でも薄々気がついていたが、それは少年誌の巻頭を飾るグラビアアイドル並の深い谷間をつくっていた。
それにブラもショーツも大人の女性にのみ許されるようなデザインだ。
そんな月子が、壁のハンガーにかけたエプロンドレスを手に取ろうとして――そのまま固まっていた。
バタン
ドアを、閉めた。
しかし、ドアをもと通りにしたところで、今起きたことがなかったことになるわけではない。
そして、周の記憶が消えるわけでもない。
「すごいものを見てしまった気が……」
それどころか、しっかり目に焼きついていた。
相変わらず身体は固まって動かない。
どれほどそうしていただろう。やがて一度は鎖された扉が再び開いた。
出てきた月子はエプロンドレスを身にまとい、いつもと変わらぬ装いだった。

しかし、そこにまだ周が立っているとは思いもしなかったのか、かすかに驚いて目を見開いた。それから次第に赤くなる顔を、一度伏せて隠す。
そして、次に顔を上げたときには、いつものメイドの顔に戻っていた。
至近距離。
一歩も引かない月子と、一歩も動けない周。
動いたら殺られる。
殺るか殺られるか。
そんな一触即発の雰囲気。
だが、実際には、周は「右ですか？　左ですか？　オラオラですか？」と内心ビビりまくっていた。
「周様」
先に口を開いたのは月子だった。
しかし、その声はやや硬い。
「は、はひっ」
そして、こっちは裏返っていた。
「先日も申し上げましたが、私の部屋を開ける際にはまず先にノックをお願いします」
「は、はい……」
「次にこのようなことがあれば命の保障はできかねますので」
「……」
本気（マジ）だ。
周は本能で直感した。
「それから――」
まだ何かあるらしい。
「私がいない間に勝手に部屋に入ることもご遠慮願います。その場合、警報が作動し、１０分以内に私が駆けつけるようになっていますので」
「き、気をつけます」

このメイドならやりかねないと思う周だった。
「では、今から夕食の支度をしますので、それまでお休みになっていてください」
業務連絡終了。
ハウス。
かくして、周の金縛りは解かれ、ぎくしゃくとした動きで部屋に戻っていった。

「眠れない……」
その日の夜中はいつもと違っていた。
なぜなら、
「腹が減った……」
というわけだった。
夕方の事件のせいで月子の顔をまともに見られなくなった周は、夕食もつまむ程度でそこそこにして、とっとと部屋に篭ってしまったのだ。
結果、充分に満たされなかった胃が夜中になって悲鳴を上げ出したというわけだ。
「ええいっ。やっぱり何か喰おう！」
周は勢いよくベッドから飛び起きた。
当初は寝てしまえばすむと安易に考えていたのだが、眠気よりも空腹感が勝ってどうにも寝つけず、しかも、暗闇の中、寝返りを繰り返していると余計なことを思い出してしまう始末。
周は忍び足で廊下を進んだ。
「カップラーメンは……あるわけないよなぁ」
周の食生活の完璧な管理を使命のひとつとしている月子が、そんなものを買い置きしているとは思えない。
キッチンの照明もつけず手探りで歩いて、とりあえず冷蔵庫を開けた。
何を探すと明確に定まらないまま中身を漁る。

「カステラがあるな。でも、切ってない。丸ごとかぶりつくか？
他には……」
ぶつぶつと独り言をこぼす。
と、そのとき、パッとキッチンの照明が点いた。
反射的に振り向くと、
「月子さん……」
「周様」
真夜中のキッチンでがさごそやっている人物に不審者の可能性を考えたのか、月子の手には伸縮式の特殊警防が握られていた。
「……」
が、そんな突っ込みどころ満点のアイテムよりも、周は月子の姿の方に目を奪われた。
クリーム色の薄手のパジャマに、白いカーディガンを羽織っている。
それだけならどうということはないが、それは周が初めて見る月子だった。いつもは首の後ろでくくっているだけの髪も今は解かれていて、よけいに違った雰囲気に見える。
そんな周の視線に気づいたのか、月子はカーディガンの前を片手でかき合わせた。
「……周様、ここで何を？」
「あ、いや、ごめん。ちょっと腹がすいてさ、何か食べるものはないかと思って……」
「……」
月子は、一度、黙り込んだ。
それから出来の悪い子どもを見るように、深いため息をひとつ吐く。
「そういうときは私に言ってください」
「いや、でも、もう夜中だし、なんだか悪いと……」
ついでに夕方の件で負い目もあったので。
しかし、そのことは口にしない。いらないことを蒸し返すだけの

結果にしかならないだろうから。
「私はメイドです、周様の。ですから遠慮は無用です。……パスタならできそうですね。それでかまいませんか？」
冷蔵庫を覗き込みながら言う。
「頼む」
「わかりました。しばらくお待ちを」
さっそく月子は周に背を向け、作業に取りかかった。

「ああ、やっと落ち着いた」
その後、寝つく前はもういつも通りだった。
空腹を満たした周はベッドに入り、慌しかった一日のことを思い返した。
「……」
途端――、
今まで目を瞑って見ないようにしてきた何かを認識しそうになった。
「今の状況って……」
が、
次の瞬間、眠気に負けて深い眠りの淵に落ちていた。

第7話　「鷹尾周のどことなく長く感じる一日」（1）

鷹尾周の一日は、朝、無表情ながら端整な顔のメイドに叩き起こされるところからはじまる。
例え日曜日であっても、それは変わらない。
そんなわけで、日曜の朝。
「起きてください、周様。朝です」
「……」
返事がない。
「周様、起きてください」
月子が再び呼びかける。
「尚、起きない場合は5分にひとりずつ人質を殺します」
「んだよ、人質って……」
ようやく周が気だるげに身じろぎした。
「周様のノートパソコンに保存されているグラビアアイドルの画像です。それを5分にひとつずつ削除していきます」
「バカ、よせ。やめろ」
布団を跳ね除け、飛び起きる。
そんな周を、月子は静かに見下ろしていた。
「……」
「……」
「……」
「……ああ、本当にあるんですか」
そして、ぼそっとひと言。
目が冷たい。軽蔑の眼差しだ。
「わ、悪いか。コノヤロウ」
どうやらカマをかけられたのだと悟った周が開き直る。
「自分だって負けず劣らずのスタイ――おぶすっ」
次の瞬間、月子の手から電光石火の地獄突き（ヘルスタッブ）が

放たれていた。喉を押さえながら周がベッドに沈む。
月子は手刀を突き出したままで、
「……忘れてください」
「……」
無言の周。
「周様？」
「……」
返事がない。殺されたようだ。
おお、周よ。死んでしまうのも無理はない。

朝食はクロワッサンにカフェオレ。
この軽めのメニューは、別に喉に一撃喰らったせいでものを食べるのが困難になったからというわけではなく、遅い起床で昼食との間隔が短いことを考慮してのものだ。
食べる周の脇にはメイドの姿。
早いうちに月子を追い出したいという意志に反して、最近メイドのいる生活に慣れつつあるのだが、しかし、この食事スタイルだけは一向に慣れない。狭いダイニングキッチンでは距離が近いからかもしれない。
「周様、今日の予定は？」
「特にねぇ」
周は口の中にものを飲み込んでから答えた。
「……何か言いたそうだな」
「寂しい日曜ですね」
「率直な感想ありがとよ」
涙が出そうだ。
「遊びざかりの高校生も、毎週じゃ体がもたないんだよ」
因みに先週の日曜は、朝から夕方まで遊び回っていた。岡本と小次郎、さらにクラスの女の子ふたりも連れて。きちんと交友関係はできつつある。

「わかりました。では、今日の周様はヒマ、と」
「……」
微妙に悪意を感じる復唱を聞きながら、周は黙ってカフェオレを飲み干した。

午前中。
周はリビングの座イスに腰を下ろして、テレビを見ていた。
チャンネルは手もとのリモコンで、真面目な政治討論番組と報道バラエティを落ち着きなく交互に切り替えている。そして、テーブルの上には社会面を開いた新聞。どっちつかずであまり効率がいいとは言えないが、世の中の動きを知ろうという気持ちはあるようだ。
そして、その脇をメイドさんが、洗濯ものを入れたカゴを持って、洗面所兼脱衣場を行ったりきたりしている。
周はさっきからその姿に、かすかな違和感を感じていた。
だが、その正体は不明。
「月子さんさ――」
それをはっきりさせるきっかけとして、周は彼女に声をかけてみる。
「その重そうな服、今はいいけど夏は地獄を見そうだな」
「大丈夫です。生地が薄くて通気性のよい夏ものも用意していますので」
ベランダに続く全面窓の向こうで、洗濯ものを干しながら月子が答える。
「他にも春秋ものと冬ものがあって。今着ているのが春秋ものです」
無駄にバリエーションが多い。
「というか、もうあれだな、居座る気満々だな。1年分用意しやがって」
「いけませんか？」
勿論それは額面通りの質問文ではなく、言外に「それのどこが悪い」と言っているのだ。

「俺としてはさっさと出ていってほしいんだよ」
「謹んでお断りします」
月子が作業する手を止めず、片手間に返す。どこが謹んでいるのやら。
「けっ」
悪態をつく周。
ひとまず持ってきた洗濯ものをすべて干し終えたらしく、月子が戻ってきた。ロングスカートから見える足がフローリングの床を踏む。
と、そこでようやく周は気づいた。
「あ、ストッキングが黒なのか」
何か違うと感じていたのはそれだったようだ。
確かに足を包むストッキングが、いつもは白なのに今日は黒。尤も、今日初めてそれに気がついただけで、今までも黒のときがあったのかもしれないが。
「おかしいですか？」
「いや、別に。つーか、俺、男だしな。そんなこと訊かれてもわかんねーよ」
違和感の正体を突き止めたことでそれきり興味を失くしたのか、周はテレビに向き直った。それを横目で見ながら、月子がどこかほっとした顔で脇を通り抜けていく。
「ん？」
そこで周がはたとあることに気づいた。
以前の事故で見た月子は、白のストッキングに合わせて、やはりピュアホワイトのブラとショーツだった。
そして、今日のストッキングは黒。
「ていうことは――おごっ！」
いきなり頭に強烈な衝撃。周は後頭部を押さえながら床に転がった。
「申し訳ありません、周様。まさかそんなところに座っているとは

夢にも思わず、力いっぱい洗濯カゴの角を叩きつけてしまいました」
「☆×■◎※△ーーーー」
「おや。脳の記憶野を粉砕するつもりが、言語野に当たってしまったようです」
「……な、何が気がつかなかっただよ。さっきまで話してただろーが……」
ようやくうめくように発音。
「忘れました」
しかし、月子は冷たくきっぱり言って、次の洗濯ものに取りかかった。

〃　「鷹尾周のどことなく長く感じる一日」（2）

午後だった。
月曜日に提出期限のある課題を終えた周は、部屋を出てリビングに入り――、
そこでぎょっとした。
月子がリビングのテーブルの上に立っていたのだ。
「な、何やってんの……？」
「見てわかりませんか？　切れた蛍光灯の交換です」
「あ、あぁ、そうみたいだな……」
月子の言う通りらしく、彼女は手を伸ばして蛍光灯を外そうとしている最中だった。
「大丈夫かよ」
「問題ありません」
「ならいいけど」
周は月子の手から視線を下ろしていく。表情に乏しい顔、ぱっと見動きにくそうに見えるモノトーンのメイド服、テーブルを踏む足は背伸びをしていた。
そして、足を包むストッキングは黒で、
「げふっ」
そこから繰り出されるキックは強烈だった。月子のかかとが周の腹にめり込む。
「足を見ないでください」
「う、ういっす……」
そろそろ自制しないと。これ以上やるともっと致命的なポイントを蹴られかねない。
こりゃ離れておいたほうが無難だな――そう思い、何か食べるものをとキッチンに体を向けたときだった。
「きゃ……」

と、小さくかわいらしい悲鳴が周の耳朶を打った。
振り返る。
そこで見たのは、テーブルの上でバランスを崩した月子の姿だった。
んなところで足なんか振り回すからっ。心の中で文句を言いつつも、考えるより早く体は動いていた。
月子の倒れる方に体を滑り込ませ、それを受け止める。が、いくら女性だから軽いとはいっても人ひとり。完全には支え切れず、周は月子もろともフローリングの床に倒れこんだ。
「痛ぇ……」
「……」
床の上に仰向けの周。
その周の上に、同じく仰向けの月子。
背中を受け止めた構図だ。
「シュ……」
そうやって落ち切った後にも拘らず、月子の口から言葉にならない悲鳴がもれた。
「へ？」
「シュ、シュウ……。手、手が……」
「手？」
手と言われたので、手を意識する。
ふにふに
「ひゃ……」
再度、月子の悲鳴。
周の両手が何か――やわらかくて、そのくせ弾力のあるものを握っていた。
すぐに己が何をわしづかみにしているか理解する。
うわ……。
と同時に、感動に似たものを覚える。
「ご、ごめんっ」

「いいから先に手を離しなさいっ」
「お、おう」
言われてようやく周はそれから手を離した。
月子が離れ、周も体を起こす。
「……」
「……」
気まずい沈黙がリビングを支配した。
周はもう一度謝ったほうがいいかとも考えたが、改めて話題にするような真似は避けたほうがいいようにも思える。かと言って、他の言葉も見当たらず――、
「あ、あー……」
まるでマイクの調子でも確かめるかのような周の発音。タイミングをはかる。
「後は俺がやるよ」
「え？」
月子は何のことかわからなかったらしい。周は立ち上がり、テーブルの上に乗った。蛍光灯の交換の続きだ。
「月子さんの背じゃ辛そうだもんな」
そう言う周は意外に長身だ。クラスで背の順に並べば、常に高いほうから3番目以内にはいる。
「し、しかし、それはメイドの仕事――」
「男がやることだよ」
周は月子の言葉に発音を重ねた。かまわず作業を続ける。
「外れた。はいよ、次」
「あ、はい」
外れた古い蛍光灯を月子に手渡すと、代わりに新しいものが返ってきた。さっそく取りつけにかかる。
「周様、スイッチを入れてもいいでしょうか？」
「やめろ。感電するわ」
なぜにこのタイミングで？　さっきの恨みだろうか。

「おしゃ、終わり」
周がテーブルから降りる。
「あ、ありがとうございます」
「こんなもん礼を言われるようなことかよ」
と、そこでふたりの目が合ってしまった。思い出すのは先ほどのアクシデント。それぞれ慌てて顔を逸らす。
「えっと、じゃあ、俺は部屋に戻るからっ」
そのままぎくしゃくした動きで回れ右。周は逃げるようにリビングを後にした。

部屋に戻ってからしばらくして、
「あれ？　俺、何しに行ったんだったっけ？」
などと思い出す。
ああ、そうだ。腹がすいたから何か食べるものを漁ろうと思っていたのだった。思って出ていったら、そこで月子が蛍光灯を替えていて、そこからすべてを吹き飛ばすような出来事が起こったのだ。
「……」
周は考える。
今もう一度キッチンに出ていったところで、果たして台所の番人である月子が食糧の調達を許すだろうか。さっきの件の怒りが冷めなかったら、最悪夕食にまで影響が出かねない。
とは言え、考えていても埒は明かない。
とりあえず行って、月子さんの様子を見よう――と、臨機応変と言えば聞こえはいいが、ただ単に腰の引けただけの作戦を立てた。
「よし」
勢い込んで、しかし、そろっと部屋を出る。
と、
そこに月子がいた。
ちょうど向こうもリビングから出てきたところらしい。
「「　ッ！？　」」

ふたりともびくっと体を振るわせるほど驚きつつも、背中を見せることは堪えた。辛うじてその場に踏みとどまる。
「お、おー……」
「……」
無意味な発声をする周と、押し黙る月子。
両者とも何を言っていいかわからないという点では同じだった。
そこで周は月子が手にしているものに気がついた。
盆の上に、スナック菓子の入った器と、アイスレモンティらしき飲みもののグラスが乗っている。
「えっと、それ……」
「あ、はい。先ほどのお礼をと思い……」
月子がたどたどしく答える。
「それほどのことをしたつもりはないんだけどな。……でも、まぁ、ちょうど腹が減ってたからもらっとく」
遠慮なく盆を受け取った。
「で、では」
月子は一歩下がり、軽く一礼。踵を返してリビングに戻っていく。その動きだけはメイドのものだったが、どこかぎこちなかった。

そして、夕食。
本日は鶏肉のソテーを中心にした洋風のメニュー。
いつもなら「学校で何か変わったことはありましたか？」などと月子に訊かれ、周が面倒くさそうに「別に何も」と答えたりする会話が交わされるのだが、この日は何もなかった。
今日が日曜で学校がなかったというのもあるだろうが、単純に午後のあの件が尾を引いているのだ。
いったい俺は今日、何をやってたんだ……？
無言のメイドさんが脇に控える食卓で、周は一日を振り返る。
ぶっちゃけ、ろくに何もしていないし、ろくな目にも遭っていない。日曜らしくのんびり過ごしていたと言えないこともないが、少

し泣きそうだ。
ただ、普段よりも月子のことはよく見れたと思う。
朝、起きたら朝食ができていた。昼に合わせて昼食を作り、こうして夕食も用意してくれた。家中の掃除をし、洗濯をして、必要ならアイロンもかける。当然そこには周が明日着るカッターシャツも含まれている。他にもよく気づき、よくやってくれていた。
ひとり暮らしをするんだと息巻いて家を飛び出た周だが、果たして同じことができるだろうか。
無論、月子は生活スキルに特化したメイドだ。同程度のことができるはずもない。だが、己で己の生活をきちんと管理し、維持できるのかと問われれば――正直、自信はない。下手をすると朝起きる段階で躓きそうだ。
不甲斐なさにため息が出る。
「どうかされましたか？」
凹み落ち込む周に、無表情メイドもわずかに心配顔。
「んにゃ。何でもねーよ」
と、一旦答えておいてから、
「あー、月子さんさ――」
改めて呼びかけた。
「……座ったら？」
「はい？」
月子は珍しくきょとんとした顔で、疑問形で返す。
「せっかく作ったもんも、すぐに食べなきゃ美味しくないだろ」
「ですが、私はメイドで――」
「いいから座って一緒に喰え。何より俺が落ち着かないんだよ、食べてる最中に横に立たれたら」
周は至極強引に力技で、月子の言葉を遮った。
「わ、わかりました……」
どうにか反論しようと言葉を探していた月子だったが、結局、そう戸惑いがちに肯いた。

自分の食事をひと通り用意して、周の正面に座る。
周はこれでようやく落ち着くと思った。こんな決して広いとは言えないダイニングキッチンで、メイドに立たれては気になって仕方がない。今までいったい何度ちゃぶ台返しをしようと思ったことか。
だから、これで落ち着くと思った。
が。
……。
……。
……。
おかしい。
やっぱり落ち着かなかった。
むしろ、例の事故の記憶が鮮明な現状、月子を視界の真ん中に入れることは逆効果なんじゃ……と気づく。見れば月子も落ち着かない様子で、不自然に周を見ないようにしながら食べていた。
しかも、どーすんだ、これ。
押しかけメイドを追い出すと言いつつ、やっていることは反対だ。
「……」
「……」
「……あー、もういいや」
周は投げやりにつぶやく。
「何か？」
「……いや、いい。気にしないでくれ」
そう短く返し、落ち着かない食事を続けた。

翌、月曜日。
一週間のはじまり。
鷹尾周は、いつも通りメイドに起こされ、ぎこちなく朝食をとり、登校の準備をして玄関へ向かった。後ろにはメイドの姿。
靴に足を突っ込む。
「んじゃ、いってくる」

「……」
なぜか返事がなかったので振り返った。
「なに？」
「いえ、別に。……いってらっしゃいませ、周様」
「ん」
そして、メイドに見送られ、いつも通りではなく家を出た。

〃　「鷹尾周のどことなく長く感じる一日」（2）（後書き）

ひとまずひと区切り。
更新も一旦休憩です。

第８話　「そんな４つの風景」

鷹尾周の一日は、朝、端整な顔ながら無表情なメイドに起こされるところからはじまる。
「おはようございます、周様」
部屋のドアの向こう、廊下からメイド――月子の声。
程なく、返事がないと判断したのか、静かにドアを開けて部屋に入ってきた。モノトーンのエプロンドレスを着込んだ一分の隙もないメイド姿だ。
「おはようございます、周様。朝です。起きてください」
再度、声をかける。
時々、ただ起こすだけでなく、叩き起こすことがあるのだが、今日はどうやら普通のようだ。
一方の周はというと、掛け布団を顔まで引き上げ、壁に向かって寝返り。月子に背を向ける。
「……あと１０分」
不明瞭な声でそう要求する。
それを見た月子は、ほんの少しだけ表情をやわらかくしてから、ため息をひとつこぼした。
まぁ、周のこれはいつものことだ。
そして、月子もこれを見越して、少し早く起こしにきている。
「では、１０分だけ。１０分後にまた起こしにきますので」
彼女は表情を引き締め、そう告げた。
そうしてから――、
きっかり１０分後、キッチンでひとつ作業をこなし、月子が再訪。
「周様、時間です」
その声に反応して、周がむくりと体を起こす。寝起きの精彩を欠いた、緩慢な動きだ。
「あぁ、ぅはよう。月子さん」

長めの前髪を掻き上げながらの、間延びした発音。
「……ちっ」
「いや、ちょっと待て。なんぞ、その舌打ち！？」
彼は月子から聞こえた、その小さな空気の振動の意味を問う。
「いえ、特に大きな意味は。ただ、周様が素直に起きたので、少々面白くなかっただけです」
「因みに、俺が素直に起きなかったら？」
「世にも愉快な起こし方が待っています」
「……」
案外、叩き起こす気満々だったのかもしれない。
そこで、ふと、月子は思案顔をした後、
「最初からそちらのほうがよかったですか？」
「よかねぇよ！」
吼える周。
「では、これまで通りに」
表情を変えず、月子は恭しく答える。
要するに、これまで通り2度目で起きなかったら強硬手段に出るという、気の抜けない朝が続くわけである。
「まー、それでも最近は起こし方も優しくなったよな」
「はい？」
月子がぴたりと動きを止める。
そんな彼女に気づかず、周は思い出す。当初はいきなり布団を剥がれたり、ベッドごとひっくり返されたりしたものだ。未遂ではあるが、のっけから最終手段というのもあった。
「なんか心情の変化でもあったのか？」
「い、いえ、別に……」
月子は答えながら顔を背けるように半回転、体をドアへと向けた。
「そうか。いや、別にいいんだけどさ」
「は、はい。では、朝食の用意ができていますので」
「わーった。着替えたら、すぐ行く」

部屋から出て行く月子と、ベッドから足を下ろす周。
そんな朝の風景。

護星高校。
鷹尾周がこの春から通っている学校。
昼休みの廊下を歩いていた周は、正面に見知った顔の二人組を認めた。こちらへと向かってくる。
ひとりは、護星高校生徒会会長兼治安維持部隊隊長、その名も竜胆寺菜々ちゃん。
もうひとりは、九条という名の上級生だ。
3年生でありながら全校生徒中最も小柄であろう体で、菜々ちゃんは堂々と闊歩。その横を九条が面倒くさそうに歩いている。
3人はちょうど階段の前で遭遇した。
「よぉ」
「あら、鷹尾じゃない」
九条と菜々ちゃんが口々に言う。
「どうも」
「鷹尾も上？」
「ですね」
答えながら、菜々ちゃんたちも階段で上へ行くのだと察した。
「どうぞ」
と、手で示しつつ、先を譲る。
「そう？　じゃあ、そうさせてもらうわ」
菜々ちゃんと九条が先を行き、その後ろをついていくかたちで階段を上る。ふたりの会話が、自然、周の耳にも入ってくる。
「んで、次の選挙も出るんですか、会長」
「とーぜん。このほうが動きやすいし、それに生徒会長としてもやり残したことがけっこうあるしね。だったら勝手がわかってるメンバーが続投したほうがいいでしょ」
「そりゃそうですけどね。でも、書記はもうやる気なしじゃなかっ

たですか？」
　九条の菜々ちゃんに対する受け答えは、あまり敬意が感じられない。
「書記は果林ちゃんが出てくれるんでしょ？　一年生だけどもうすでに手伝いに入ってくれてるし、あたしも推すから。これでほぼ理想のメンバーなんじゃない」
「やっぱ果林を巻き込むのか……」
　九条はなにやら納得いかない様子で頭を掻いている。
「不満そうね」
「まぁ、な」
「ふうん……」
　階段を上り切る。
「そうだ、鷹尾！」
　と、急に菜々ちゃんがこちらに振り返った。
「あんたの周りで生徒会に立候補しそうな子、いない？　できれば戦えそうなのがいいわね」
「いったい何と戦う軍団をつくり上げる気か知りませんが、俺、上級生に知り合いいないし。周りにもそんな活きのいいやついませんよ」
　答えた周は、逆に訊き返す。
「生徒会の選挙ですか？」
「そう。ゴールデンウィーク明けにね」
「このちびっ子も出るから、お前、入れろよ」
　瞬間、
「誰がちびっ子よ！？」
「うお、危ねっ」
　菜々ちゃんの上段蹴り（ハイキック）と、九条の腕受け（アームブロック）。
「ていうか、強制してんじゃないわよ」
　ぴしゃりと菜々ちゃん。

「いい？　なんで多数決が民主主義的かわかる？　議論を尽くしたという前提があるからよ。それがなければ単なる数の暴力なの。選挙も同じ。全員が熟考した上で投票するから成り立つの。だから鷹尾も、あたしに入れなくてもいいから、しっかり考えてから投票するのよ。いいわね？」
「お、おう……」
菜々ちゃんにひと息に言われ、気圧されつつ周はうなずいた。
別に周としては立候補者に知った顔はないだろうから、九条に言われるままに菜々ちゃんに投票してもよかったのだが。
「えっと、九条先輩？」
今はそれよりも気になることがある。
「もしかして菜々ちゃん会長って、けっこうまともですか？」
「驚くだろ？　体は遠近感狂ってて、運動能力もトチ狂ってるくせにな。人間としてはかなりまともなんだ」
周が思っているほど飛び散ったキャラクタではなかったようだ。
「あ、あんたらねぇ……」
見れば菜々ちゃんが腕を組み、口の端をひくつかせていた。
「おい、鷹尾。逃げるぞっ」
「お、おうっ」
身の危険を感じて駆け出す男ふたり。
だが、相手はさすがトチ狂った運動能力を誇る菜々ちゃん。周が2歩と進まぬうちに捕まってしまった。
その隙に九条の背中が遠のいていく。
足の遅い草食動物は生き残ることができない。正しく弱肉強食を痛感した。
そんな昼休みのひとコマ。

一日の学業を終え――下校。
周の住むマンションは、護星高校から15分ほどのところにある。駅からも徒歩圏内なので、非常に立地条件はいい。

その帰路でのこと。
全行程の中ほどまできたところで、周は自分の前方にひとりの少女が歩いているのに気がついた。
周と同じく護星高校の制服を着ている。手足が長く、すらりとした後ろ姿。それを見て周は、きれいなシルエットだな、と漠然と思った。
歩く速さに差があるのか、だんだんと近づいてきた。周は速度を落とす。
道は道路沿いの歩道。車は走っているが、人影は疎ら。
この状況は不味そうだ。
そう思った矢先、前方の少女が足を止め、思わず周も立ち止まってしまった。
彼女は振り返りはしない。だが、意識をこちらに向けていることは伝わってくる。
さらに不味い状況になった気がする。
再び少女が歩き出し、遅れて周も足を前に踏み出した。やはり警戒の気配を感じる。彼女にしてみれば、後ろからついてくる何ものかが自分と同じタイミングで足を止め、また歩き出したのだ。当然と言えば当然だ。
「……」
まいったな――周は心の中でつぶやき、そして、意を決した。
歩く足を一気に速め、だけど、先を歩く少女からはできるだけ離れたコースをとる。
「えっと、悪い」
「え？」
怯えたような、小さな発音。
「なんか誤解させてるみたいだから、先に行かせてもらうわ」
しかし、周はそうひと言断って、横を抜ける。
彼女はついに何かされるのかとぎょっとして身を竦ませていたが、周はかまわず顔も見ない。呆然とする少女に見送られるようにして、

家路を急いだ。
そんな下校風景。

「ただいまー」
「おかえりなさいませ、周様」
玄関を入ると同時、奥から出てきたエプロンドレス姿の月子が迎えた。
「……」
そして、周は靴を脱ぎ散らかす運動を止め、思わず斜め下を向いて考え込んでしまう。
「どうかしましたか？」
「……いや、何でもない」
口にしないだけで実際に何でもないわけではない。
２ＬＤＫのマンションの一室に、完全装備、オールタイム臨戦体勢のメイド。この状況にずいぶん慣れたつもりでいたが、外から帰ってきたときなどに強烈な違和感を感じる。壮絶に質の悪い冗談だ。
「そうですか。では、夕食の用意ができていますので、いつもの時間に」
告げて月子は回れ右。短い廊下の突き当たり、リビングに通じるドアの向こうに消えた。
周は廊下の途中にある自分の部屋へ。
今度、帰ってきた直後に、何かネタでも飛ばしてみようかと、わりかし真面目に考えた。

そうして夕食、である。
少し前から周と月子、主とメイドは一緒に食事をとっていた。今もテーブルに向かい合って座っている。
「周様、今日は学校で変わったことはありましたか？」
「いや、何も」
月子の問いに周は、添えられた温野菜は無視して鶏肉のソテーに

目標を定めながら答えた。
「あぁ、そう言えば……って、なんだよ、その顔」
言葉の途中、月子が眉根を寄せているのに気づく。
「いえ、深く考えずにとりあえずないと答えるのだな、と」
「ほっとけ。つーか、何かあったのは帰りで、学校じゃ生徒会長にブン回されたくらいで、本当に何もなかったんだよ」
それだけでも十分である。
「それで、帰りに何か？」
「女の子がいたんだ」
「女の子、ですか？」
途端、月子が複雑な表情をつくったのだが、周はそれには気づかず続けた。
「俺と同じゴ高の子。この近くにいたんだなと思ってさ」
「きれいな方でしかた？」
月子の声が少しだけトゲっぽい。
「きれい、かぁ。確かにきれいだったな、後ろ姿が」
「後ろ姿？」
そして、今度は気勢を殺がれる。
「こう、背筋が伸びてて、歩き方がきれいなのな」
「顔は見たのですか？」
「いや、後から追い抜かしただけだしな。それに顔を見たところで、美人とかかわいいとか、正直言ってそういうのよくわかんねーし、俺」
苦笑いする周。
月子も「そうですか」と、小さく笑った。
「あ、でも、あれだな。あの後ろ姿だったら、きっとかわいいんじゃないか」
「周様、食べないのでしたら迅速にお下げしますが」
「めちゃめちゃ喰ってる最中だろうがっ」
そんな夕食のワンシーン。

そんなメイドのいる生活――。

第9話　「器用じゃないふたり」

カレンダーはゴールデンウィークに突入し、
そのある日のこと、周は自室で友人と電話で話をしていた。
「んじゃ、明日は1時に集合ってことで」
話題は高校生らしく遊びにいく約束。
「結局、いつものメンバー？」
『だーな』
電話の向こうの相手はクラスメイトの岡本哲平だ。
いつものメンバーというと、周に岡本、天根小次郎、そこに一二三と森という同じクラスの女子生徒が加わる。
「天気、大丈夫か？」
『大丈夫なんじゃねーの？　今日も日本のどこかじゃ真夏日らしいしな。ゴールデンウィーク中はずっとこの調子だーとよ』
「それは重畳」
5月にしてすでに夏を先取り。地球温暖化って本当なんだなぁ、と短絡的に思う周だった。
「思わず女の子の薄着に期待してしまうな。特に一二三なんか露出度高そうだ」
『おーい、気をつけろーよ？　あいつ、自分が男の目を引くって自覚してやってる節があるからな。うっかりしてると痛い目みーるぜ？』
「そんなもんかねぇ」
その手の女であることを武器にした駆け引きというものにピンとこない周は、首を傾げるばかり。まぁ、視覚的に楽しめたらいいか、と結論を落ち着かせた。
「じゃ、明日な」
最後にもう一度、明日の約束の確認をしてから通話を終える。
周は携帯電話を折りたたむと、それを手に持ったまま自室を出た。

向かうはリビング。短い廊下を抜け、突き当たりにあるドアを開けてリビングに這入る。
「月子さん」
「なんでしょうか、周様。……その鬱陶しそうな顔は」
月子はちょうど夕食の準備中だった。周の登場に振り返ったはいいが、その周が自分を見るや顔をしかめたのを見て取り、むっとして言葉をつけ加えた。なぜそんな顔をされなければならないのか。
「いや、月子さん見たら体感温度が上がった。……暑くないのかよ、その格好」
「特には。メイドの正装ですので」
ロングスカートのエプロンドレスを着込んだメイドさん（重装型）は、しれっと言ってのけた。
この地域は真夏日でないにしても、例年のこの時期にしてはやはり破格の気温だ。ニュースでは全国的に7月上旬並みだとも報じられている。周もトップスはTシャツ一枚という格好だ。
「いや、まぁ、それだったらいいんだけどよ」
言って周は、リビングの座椅子に腰を下ろした。リモコンでテレビを点け、何か面白い番組はないかとチャンネルをくるくると変える。
月子はその様子を見て、わずかに思案。
「実は――」
と、自分もリビングの側にやってきた。
「このユニフォームには丈の短いのもあるのです」
「ふ、ふーん……」
周の背中がぴくりと跳ねた。
それを認めた上で、月子はさらに続ける。
「なにせ短かすぎてストッキングとスカートの間に素肌が見えてしまいます」
「……」
ビバ、絶対領域。

「しかもそこにはガーターのベルトが」
「……」
ついにゆっくり振り返る鷹尾周（１６）。
「……マジ？」
「……嘘です」
「……」
「……」
「……」
「……こんな話題に喰いついてくるとは、最低ですね周様」
虫でも見るような月子のジト目が痛い。
「う、うるせー。男はみんな短いほうが好きなんだよっ」
開き直って自ら最低に輪をかける周。
「残念ながら、そんな無防備な格好をするつもりはありません。私が大学でなんと呼ばれているか知っていますか？　皆、私の鉄壁ぶりを差して、こう呼ぶのです。疾風月子（ツキコ・デア・シュトルム）と」
「鉄壁じゃねぇのかよ！？」
周が石器時代の勇者のように吼える。壁は壁でも、双壁のほうらしい。
結局、周はそのまま、つき合ってられるかと月子に背を向け、再びテレビに向き直った。
「鉄壁なら鉄壁らしく、着替えのときくらいドアに鍵……をゴッ！？」
直後、言葉が終わらぬうちに、月子の白いストッキングに包まれた足が、彼の首筋を襲った。
骨よ砕けよ、記憶よ飛べ。
見事な中段蹴（ミドルキック）りだった。
「明日、遊びに行くことになったから」
周が、どうにもぐらぐらして仕方がない首を手で支えながら、忘れていた話題を改めて切り出した。

「わかりました」
応える月子は、テーブルをはさんで周の反対側に座っている。テーブルの上にはふたり分のコーヒーが置いてあった。夕食までにはまだ時間があり、月子が入れたのだ。
「お帰りはいつ頃になりますか」
「いんや、決まってねぇ」
「そうですか。早かったり遅かったりするようでしたら、連絡してください」
「わーった」
言いながら周はテレビに目を向ける。
それから少し間があいてから、何の気なしに言葉を加えた。
「当然、家デンのほうだよな」
そして、月子も特に考えることもなく返した。
「そうですね。周様は私のケータイのほうは知らないでしょうから」と。
そこでふたりはあることに、はたと気づいた。
周は思う。あれ、月子さんってケータイ持ってたっけ？
月子も思った。そう言えば、シュウにケータイの番号おしえてなかったような。
……。
「えっと、月子さんってケータイ持ってんのか？」
「え、ええ、いちおうは……」
「……」
「……」
お互い次の句が継げず、顔を見合う。
かくして、場は微妙な空気に包まれ――周は黙ってテレビに戻り、月子は何かを取り繕うようにしてコーヒーに口をつけた。
この瞬間、考えていることはふたりとも同じだった。即ち、携帯電話の番号を聞いておいたほうがいいのだろうか――ということ。
ただ、そうは思ってみても、行動に移すにはやや技術が不足して

いた。
例えば周は、遊びにいく約束をしたついでになら、女の子相手に「ケータイ番号おしえといてくれない？」と、ごく自然に言えたりするのだが、何もないこの状況ではそれを言い出すには少々ハードルが高かった。
そして、月子もまた、周以上にそういうのは苦手だった。
その結果、ふたりは何気ないふうを装いつつも、ちらちらと相手の出方を窺うという状況ができあがった。どう切り出したものか。妙な緊張感だけが高まっていく。ふたりが沈黙した今、テレビから流れてくるニュース番組もどこか空々しく、むしろ逆に沈黙を演出する装置と成り果てていた。
程なく周がひとつ閃く。
「あ、そ、そうだ、月子さん」
「は、はいっ」
言葉を詰まらせながらも自ら打って出る周と、いきなり動きを見せた周に慌てる月子。
「もし俺が電話したときに月子さんが家にいなくて、出なかったらどうしたらいい？」
「周様がいつ帰ってきてもいいようにしておくのがメイドの務めですから、そういうことはまずないかと」
「ぶっ」
周は想定していたのと違う返しに、思わず吐血しそうになった。
「……」
「……」
見事な連係プレーで着地点を誤った。
今さらながら痛恨のミスに気づいた月子が、無声音で「あ……」ともらす。
「あ、いや、それなら問題ないな、うん」
「え、ええ……」
そうして周は再び顔をテレビに戻し、月子は天井を仰ぎ見た。

「あ、周様？」
今度は月子が失態を返上しようと切り出した。
「周様が学校に行っている間に連絡の必要が出た場合、どういたしましょうか？」
「ああ、学校じゃ基本的に電源を入れないのが決まりなんだ。緊急の場合は職員室に連絡してくれってさ」
「……は？」
しかし、周が盛大に蹴り返してしまった。
「……」
「……」
「そ、そうですか……」
「……」
再び着地失敗。
今日何度目かの静寂が訪れた。いつもなら落ち着きなくチャンネルを変えている周の手がすっかり止まっているが、しかし、限りなくワイドショー化されたニュース番組も頭に入っている様子はない。月子のほうはとっくに空になったコーヒーカップの底を黙って見つめている。
このままでは不味いと思いはじめていた。今ここで携帯アドレスをおしえ合う必要がないと結論してしまえば、二度と機会はやってこないだろう。
「例えが悪かったと思うんだ」
そんなことを言いながら、周は改めて月子に向き直った。月子も居住まいを正す。
「もし、だ――明日、俺が遊びにいってる間に、親父が死んだとしよう。事故死でも病死でも爆死でもいい。そうしたら緊急に連絡をとる必要がある」
殺した。自分の父親を殺した。
「ええ、確かに」
そして、こっちはそれを受け入れた。

どうして周に直接連絡がいかず月子を中継しているのかというツッコミどころもあるのだが、きっと今はその点には目をつむる必要があるのだろう。
「もうひとつくらい例が欲しいところだな」
「では、こういうのはどうでしょう」
月子が提案する。
「周様が学校で具合が悪くなって早退するので、大学に行っている私に連絡する必要が出たと」
「なるほど。あり得るな」
少なくともいきなり父親が爆死するよりは可能性が高い。
周と月子はお互いの顔を見合う。アイコンタクト。ここに意思の統一ははかられたと確信した。
「よし、じゃあ、月子さんのケータイ番号おしえといてくれ。俺もおしえるから」
「わかりました。いつ何があるかわかりませんから」
うなずき合い、ふたりはようやくいそいそと赤外線通信でデータのやり取りをはじめた。
結局はそこなのだ。不測の事態に備えて――それだけで理由はこと足りるはずなのに、あまり器用でないふたりは、いちいちわかりやすい事例を示した上で自分を納得させないといけなかったらしい。
やがでデータの交換は終わり、それぞれのアドレス帳に一件の番号が追加された。
「やはり周様のケータイの中には女の子の番号が？」
月子がやや硬い面持ちで問う。
「ま、それなりにな」
それこそ一二三や森とは、意気投合して学校帰りに遊びにいったその日に番号を交換している。
そんな周の答えに月子の目がちょっと据わったのだが、彼は気づいていない。
「そういう月子さんだってあるんだろ。男友達のが」

「え、私、ですか……？」
月子は目を自分の端末と周に交互にさ迷わせてから、反応を窺うように口を開いた。。
「も、もちろん、ありますよ」
「だろうな。大学も2年目だもんな」
しかし、周はその返答に笑って応えるだけ。
月子がちょっとだけ口を尖らせ、
ため息ひとつ。
「さて――」
と、立ち上がる。
「そろそろ夕食にしましょう」
「……」
スタスタとキッチン方面に立ち去る月子。
その背中を見送りながら「俺、何か悪いことしたっけ……？」と首を傾げる周だった。

第１０話　「噂の？　美少女？」

ゴールデンウィークの中にぽっかりあいた平日。
そんな日でも鷹尾周の一日は、朝、端整な顔ながら無表情なメイドさんに起こされるところからはじまる。
「おはようございます、周様。朝です。起きてください」
「……起きたくねぇ」
朝を告げた月子に返ってきたのは、しかし、そんな周の言葉だった。
毎朝必ずもう少し寝かせろとごねる周だが、起きたくないと言ったのは初めてだ。
「つーか、学校行きたくねぇ」
続く言葉に月子がわずかに心配顔になる。
学校に、行きたくない？
はじまったばかりの高校生活で何かあったのだろうか。行きたくなくなるような何かが。
「ゴールデンウィークなんだから気前よく休みにしろよな」
「……」
そんなことかよ。
月子の目が、心配して損したぜこの野郎、と半眼になるが、こちらに背を向けて体を丸めてしまっている周には見えない。
「何を我侭言ってるのですか。それが学生の務めというものでしょう」
「明日も明後日も休みなんだ。我侭だって言いたくなるよ」
周は布団を口許まで引っ張り、さらに体を丸める。今日は一日ベッドから出ないとでも言うように。
月子は呆れたようにため息をひとつ。
「まぁ、高校は義務ではありませんから、自己責任で休むのもひとつの選択かもしれませんね」

「……」
何やら考えているふうの周の背中。
すると、
程なくもぞもぞと動き出し、のっそり起き上がった。
「やっぱり行くわ」
「……いきなりの方針転換ですね」
「まぁな」
彼は長めの前髪を手でかき上げる。起きたときによくする仕種だ。その下にある切れ長の目は、まだ寝起きのせいか精彩を欠いていた。
「それこそ義務じゃなく、自分で行くと決めた学校だしな。中途半端はよくねーよな」
苦笑しながら言う。
周だってわかっているのだ。文句を言ったところで休みにはならないし、それが学生という身分だということを。そして、行くのも休むのも自己責任において自由だということも。結局のところ、ごねてみたいだけなのだろう。
「そういや月子さんも大学だろ？」
周はベッドの上にあぐらをかき、固まった体をストレッチでほぐしながら月子に問う。
「ええ。ですが、とっている講義はすべて休講になりましたので、結果的に休みです」
「ちっ。いいよなぁ、大学生は」
そんなものである。
学生も休みたいし、先生だって休みたい。授業をやったところで学生がこなければ意味がないし、サボる学生も多いだろうことは容易に想像がつく。結果として、利害の一致をみて、多くの講義が休講になるのだ。
「……周様さえいなければ、私ももう少し寝られたのにと思わなくもないですが」
ぼそっと。

大学のついでに仕事も休みたいらしいメイドさんはつぶやく。
このアホの子なからましかばと覚えしか。
「……」
「……」
こんにゃろう、と周が月子を睨むと、彼女はすっと目を逸らした。
その態度にさらにむっとして周は、
「休みたかったら休めば？　俺も労働基準法的な指導を受けたくないしな」
「ええ。でも、それは一日放置しても周様が死なないと確信できたときにしたいと思います。……では、朝食ができていますので、いつでもどうぞ」
そう言い残し、月子は一礼して部屋を後にした。
「俺ってそんなに何もできないように見えるか……？」
一日で死ぬかよ、と思う。
でも一日でけっこう弱るかも、とも思う周だった。

遅刻ギリギリの時間に登校すると、昇降口の下駄箱の前でクラスメイトと顔を合わせた。
キツくならない程度にシャープな面立ち、細身ながら精悍な身体。やや浅黒い肌は長年スポーツで繰り返し日に焼けたことを示している。
「おはよーさん」
「ああ、鷹尾か。おはよう」
天根小次郎だった。
周とは『あまね』の音が同じため、周は彼のことを名前で呼び、彼は周を姓で呼んでいる。
「サッカー部は今日も朝練か」
周は彼が持っているスポーツバッグを見て尋ねる。実際には必ずしもスポーツバッグと朝練が直結するわけではないのだが、小次郎の顔には早朝の練習を終えた後の充実した疲労感が窺えた。

「さすがゴ高。一年生にも容赦がないな」
「まぁな」
口数少なめな友人は、靴を履き替えながら短く返す。
ここ護星高校はスポーツを推奨し、運動部の活動に力を傾注している。それは晩年にはＩＯＣ（国際オリンピック協会）の委員まで務めた創設者の方針によるもので、昇降口で生徒たちを迎える彼の銅像には『剣よ舞え、拳よ唸れ』という座右の銘が彫られているほどである。
周も靴を履き替え、ふたりで教室を目指す。
朝のホームルーム直前の学校は賑やかだ。単純に考えて登校してきている生徒は限りなく最大値に近づいているはずで、どの教室からも明るい話し声が聞こえるし、別のクラスの友達同士が廊下で話していたりもする。
そんな騒がしい朝の廊下を、周と小次郎は他愛もない話をしながら歩く。
と、
「いたーっ」
突然、耳を劈くような声が響き渡った。
周の背後。
何かと思って振り返れば、声の主と思われる女子生徒が開け放した教室の窓から顔を覗かせていた。
彼女は一度姿を消すと、程なくばたばたとドアから飛び出してきた。そして、跳ねて両足で着地するようにして、周の前に立つ。小顔で、そのわりにはくりっと大きな目をした女の子だった。
「おはよう！」
明るい元気な声が発せられた。
「お、俺？」
「もちろん！」
思わず自分の後ろを確かめてから聞き返す周に、彼女は大きくうなずいた。

「お、おはよう……」
周は勢いに負けて挨拶を返す。
「おしえて、名前」
「……鷹尾、だけど？」
「たかお……。ん？　どこかで聞いた、いや、見たような？」
女子生徒は視線を宙に彷徨わせ、首をひねる。
周は助けを求めるように、隣にいる小次郎を見た。が、彼は特に何か口を出すつもりはないようだった。困った。というか、面倒くさくなってきた。
「えっと、悪い。もう行っていいか？」
「え？」
そこで丁度チャイムが鳴った。
「ほら、ホームルームもはじまるしさ。じゃ、そういうことで」
「がーん」
コミカルにショックを表現する女の子にかまわず、周は背を向けた。小次郎とともに歩き出す。
「で、誰？」
チャイムが鳴り終わるのを待って、友人に尋ねる。
「……古都翔子（ふるいち・しょうこ）」
「なんだ、知り合いだったのか」
「いや」
と、彼は否定する。
「でも、一年の間じゃけっこう有名だ。それに向こうはお前のことを知ってるふうだったぞ」
「そんな感じだったな」
はて、いったいどこで会っただろう？　さっぱり覚えがない。
「んで――なんで有名なんだ？」
「そんなもの、見たらわかるだろ。かわいいからに決まってる。俺に言わせれば、一度見たら忘れられないあの顔を覚えてないお前が不思議だ」

「そーゆーもんかねぇ」
確かに周もかわいいとは思った。だけど、それを話題に本人のいないところで騒いだりするのは、どうにもピンとこない。
「ふるいち・しょうこ、か……」
周は口に出して発音してみる。が、顔同様やっぱりその響きにも覚えがなかった。

ゴールデンウィーク真っ只中の登校ということもあり、最後までやる気の出ないまま本日の学業を終え、年ごろの少年らしく友人と寄り道をして帰ってきた周。
「お帰りなさいませ、周様」
「……」
その周を待っているのは、２ＬＤＫのマンションにはおおよそ似つかわしくない姿の人間と、迎えの挨拶だった。
「夕食の準備ができています」
しかし、それでもひと月も過ぎればいいかげん慣れてくるもので、ここは一発冗談でも飛ばしてみようかという気になるくらいの余裕はあった。
「食事よりも先に月子さんを頂……ぐぼっ」
次の瞬間、エプロンドレスの長いスカートの裾から電光石火の勢いで前蹴りが繰り出され、周の腹に炸裂していた。
周の身体は、未だ閉じ切っていなかったドアを押し開けて吹っ飛び、マンションの廊下に転がり出た。バッタン、とすべてを拒絶するようにドアが閉まる。
「ッ〜〜〜！」
ひとりバックドロップのような複雑な構造のまま、この手の冗談はメイドという人種にとって禁忌なのかもしれない、とわりかし真面目に考えてしまう周だった。
その後、よろよろと立ち上がると再びドアを開けた。
「お帰りなさいませ、周様」

「……」
月子は何ごともなかったかのように、いつも通りの挨拶で周を迎えた。
実際、一言一句台詞が同じ辺り、すべてなかったことにするつもりのようだ。品のない冗談を聞いたことも、メイドが己が主に前蹴りを喰らわして外に叩き出したことも。
「夕食の準備ができています」
「……わかった。着替えたら行くよ」
「お待ちしております」
有能なメイドは恭しく応えるとキッチンに下がっていく。
そのときだった。
「あ」
周が小さな声を上げた。
月子が振り返る。
「何か？」
「思い出した」
「……何をでしょうか？」
聞き返しつつ、眉根を寄せる。
「んだよ、その微妙な表情」
「いえ、蹴られた拍子に忘れていたことを思い出す人間が、思いのほか気持ち悪かったもので」
「ほっとけっ」
メイドのわりには言うことに遠慮がない。
「それで、いったい何を思い出したのでしょうか？」
「ああ、そうだった。今日、学校で見知らぬ女の子に挨拶されたんだ」
「……」
またも眉根を寄せ、どちらかと言うと不機嫌顔になっているのだが、月子にその自覚はない。
「それで誰だろうってずっと考えてたんだが――やっと思い出した。

この前、帰り道で会った子だ」
「ああ、周様が追い抜かしたという」
「そう」
見覚えがないのも当然だ。あのとき、ろくに顔も見ずに脇を通り抜けてきたのだから。
やっとすっきりした、と笑う周。
「そうだ。予想通り、けっこうかわいかったな。なんか学校でもそれで有名らしい……すおっ」
周の言葉が終わらぬうちに、再び月子の前蹴りが彼の腹に炸裂した。
またもドアを壊す勢いで、マンションの廊下に飛び出す。
ひとりバックドロップの構造で、バッタン、とすべてを拒絶する音を聞きながら、「なぜ……？」と思う。
そして、
ガチャン、とドアに内側から鍵をかけられた。
「いや、ほんと、なんでだよ……」
まさかこの年で言うことを聞かない子どものように家の外へ締め出されるとは思わなかった周だった。

第11話　「ご近所トラブル完全防止マニュアル」

ゴールデンウィークが明けて、最初の土曜のことだった。
「選挙？」
本日最後となる3時間目の授業を終えた後、鷹尾周は岡本との雑談の中で間抜けな声を上げた。
「おーうよ。選挙。知らなかった？」
「知ら……いや、忘れてた」
確か菜々ちゃん会長がそんなことを言っていたような気がする。ゴールデンウィーク明け、最初の土曜の終礼終了後に生徒会役員選挙があるのだとか。すっかり忘れていた。
「もう帰れると思ってたのにな」
完全に『今日は学校終わり』モードに切り替わっていただけ、けっこうショックだ。
（って、そんなこと言ってる場合じゃないな）
家を出る前、月子に「何もなかったらまっすぐに帰ってくるし、何か用ができたら電話する」と言ったのだ。重ねて言うが今日は土曜日。月子は昼食を作って待っているに違いない。
（電話、しとかないとな）
周はこの後のスケジュールを思い出す。担任の先生がきて、終礼。その後、立候補者による校内放送での演説があり、投票。クラス委員が集めた投票用紙を選挙管理委員のところに持っていく。ぜんぶで1時間弱といったところか。最後の工程は周には関係ないが、それでも先生がきてしまえば後はノンストップ。月子に連絡するなら今しかない。
「悪い。ちょっと」
断って周は席を立った。
廊下へ出る。今は3時間目が終わった直後、担任がくるのを待つだけの時間だが、廊下に出ている生徒もいくらかいた。周は窓にも

たれて携帯電話のメモリィを呼び出す。
藤堂月子。
「あ……」
その名を見て小さく発音する。
気づいたのだ。これが月子への初めての電話になるということを。
それを意識した瞬間、周は端末を握ったまま動きが止まってしまった。
「……」
じっとそれを見る。
わけのわからない緊張があって、次の足が踏み出せない。
とは言え、いつまでもこうしているわけにはいかなかった。いずれ担任がくる。そして、月子は有能なメイドだから、周が帰宅するタイミングに合わせて昼食を用意しているはずだ。そこを連絡もせずに遅くなったりしたら、有能なメイドであるところの月子の手からは地獄突き（ヘルスタッブ）が飛んでくることは火を見るより明らかだ。
「……」
いや、有能なメイドさんはそんなことしないような気もするが。
兎も角。
何かあれば連絡すると言った以上、その約束を違えるのは周の主義に反する。
「ええい、くそ」
電話一本かけるだけとは思えないやけっぱちな意気込みで、ついに通話ボタンを押した。
端末がメモリィから電話番号を拾い上げ、自動でダイヤル――そして、コール。
1回。
2回。
落ち着け落ち着け。周は自分に言い聞かせる。たかが電話だ。緊張するようなことじゃない。

３回
４回。
コールが繰り返される。
５回。
６回。
「あれ……？」
思わず口からそんな言葉がもれる。
出ない。
今日の月子は大学の講義もなく、一日家にいるはずだ。勿論、買いものに出かけたりはするだろうが、電源を切ったり電波の届かないところにいっているとは考えにくい。自室に端末を放り出したままキッチンで仕事でもしているのだろうか。
だんだんと緊張がほぐれてきた。出ないのならどうしようもない。
「いやあ、ちゃんと電話したんだけどさ、月子さん出ないし。そのうち先生もきたしな」、などと帰ったときに言う台詞まで考えているときだった。
急にコール音が途切れた。
「ッ！？」
そして、
『は、はひっ』
出た。
月子が電話に出た――のはいいが、なぜか声が裏返っていた。
「……」
遠くで携帯電話が鳴っているのに気がついて、慌てて駆け寄って取ったとか、そういう状況だろうか。
『シュ……、周様ですかっ？』
「あ、ああ、そうなんだけど……えっと、大丈夫か？」
思わず聞いてしまう。
『な、何がでしょうか？』
「いや、なんかすっげぇテンパってるみたいなんだけど」

『そ、それはその……』
と、そこで月子は、んんっ、咳払い。
『だ、大丈夫でふ』
「ぜんぜん大丈夫に見え……いや、いい。大丈夫ならいいんだ」
さっきの咳払いは何だったのだろうか。周はこれ以上触れないことにした。
「で、えっと、だな」
『は、はい』
「俺もすっかり忘れてたんだけど、今日、今から選挙があるんだ。生徒会の。だから悪いけど、いつもより遅くなる」
『わ、わかりました』
「……」
『……』
「以上」
『はい……』
「……」
『……』
話が途切れた。
これで用件は伝え終えたはずなのだが、もう少し何か話したほうがいいだろうか、と周は首をひねる。クラスメイトなり中学時代の友人なりが相手ならテキトーに雑談も交えるのだが、月子相手ではそれも何か違うような気がしないでもない。
「えっと、月子さん？」
『は、はひっ』
電話の向こうの月子は、相変わらず反応が過剰だった。
「そっちからは何かある？」
『い、いえ、こちらは特に』
「そっか」
何となくほっとする周。
「じゃあ」

『あ』
「な、なに？」
そして、今度は予期せぬ時間差攻撃に焦る。
『い、いえ別に……』
「……」
しかし、意味はなかったらしい。
「じゃ、そういうことで」
『わかりました』
そうして通話を切る。
振り返ってみれば、用件をひとつ伝えただけなのだが、やけに疲れてしまった。周は体から無駄な力を抜くようにして、長く息を吐いた。極力月子には電話をしないようにしようと思う。
（月子さん、電話苦手そうだしな）
人に言えた義理か。
やるべきことを終えて教室に入る。
「んで、岡もっさんよ」
席へと戻り、横座りで隣の岡本哲平に向かう。
「その生徒会選挙とやらは、立候補者はどんなもんなんだ？　興味のない俺からしたら、そんなもんに出るやつの気が知れんのだが」
「そーうよ、それそれ。乱立してるわけじゃないけど、それなりにいるみたいだーな。思惑は人それぞれ。本気の本気だったり、内申書の足しにしたかったり。でも、ま、菜々ちゃん一派で鉄板だろうけんど」
「菜々ちゃん一派？」
周は思わず頭にデフォルメされた菜々ちゃんの集団を思い浮かべた。６人の菜々ちゃんが、１列目にひとり、２列目にふたり、３列目に３人、と三角形に並んでいるのだ。勿論、思い浮かべた後、全員から飛び蹴りを喰らったが。
「……なんだ、そりゃ？」
「去年後期の生徒会長だった菜々ちゃん会長が、仲間を引き連れて

また出てきたんだよ」
岡本曰く――、
まず会計が会長と同じく2期連続の立候補。副会長は菜々ちゃん会長が自ら見つけてきた生徒で、なかなか評判のいい優等生らしい。
「書記は？」
「これがなんと1年生なんだ」
「へえ」
1年生が立候補してはいけないという決まりはないのが、上級生に比べたらどうしても弱い。そこを補強するのが菜々ちゃんの推薦であり、就任後を見越して入学直後から生徒会の手伝いに入っているという実績である。
そう言えば菜々ちゃん会長がそんなことも言っていたな、と周は思い出す。名前は果林といったか。思い起こせば、初めて菜々ちゃん会長を見たときにお供として一緒にいた眼鏡の女の子が、件の彼女だったのかもしれない。
こうして菜々ちゃんは完全に布陣を固めて選挙に挑んでくるらしいのだ。
「後でそのメンバーの名前おしえてくれ。俺もそこに入れるから」
「あーいよ」
菜々ちゃんから自分でよく考えて投票するようにと言われた気もするが、これまで立候補者の選挙活動には見向きもしてこなかったのだからよく考えても何もあったものではない。
結局この後周は、投票用紙に書かれた菜々ちゃん一派の名前の上に、ぐりぐりと丸をしたのだった。

いつもより遅い土曜日の帰り道。
周の通学路を学校側から見た場合、途中までは駅へ行く道と重なるのだが、中ほどで住宅街へ入ることになる。よって、友人たちと一緒に学校を出ても、途中でひとり離脱を余儀なくされる。平日ならばよく駅まで行ってひとしきり遊んでから帰ったりもするのだが、

今日はそれもなし。真っ直ぐ帰宅である。
「さすがにちょっと腹が減ったな」
思わず独り言が口をついて出る。
登下校の所要時間は１５分程度。もう半分を過ぎているので、後５分少々で家に着き、程なく食事にありつけるだろう。
「じゃ、これ食べる？」
「おわっ」
いつの間にか横に女の子が並んでいて、周は飛び上がるほどに驚いた。淡い栗色の長い髪に、小顔ながらくりっとした大きな瞳。確か名前は――、
「えっと、フルイチさん？」
「そういう君はタカオ君」
噛み合っているのか噛み合っていないのか、よくわからない会話。
そう、ゴールデンウィークの合間に学校で会った古都翔子（ふるいち。しょうこ）だ。
「いつからそこに？」
「タカオ君が『超お腹減ったし』って言ったところ」
「……」
そんなことは言っていない。
「というわけで、はい、これ」
そう言って差し出してきたのは、銀色の包み紙に包まれたもの。飴か、ソフトキャンディか。
「なに、これ？」
「ぷっちょ。しかも、この辺りじゃレアなご当地ぷっちょ。いよかん味」
「……」
果たして初対面も同然の女の子からもらっていいものだろうか。なんとなく試されている気がしないでもない。図々しく受け取ったらアウト、みたいな。とは言え、これがあれば残り5分少々の間、腹の足しになって助かるのは確かだ。

「せっかくだからもらっとくよ」
葛藤の末、周はそれを手に取った。
包み紙を開き、口の中に放り込む。噛めばソフトキャンディとグミの食感。勿論、いよかんの味だ。隣りでは翔子もスカートのポケットから同じものをもうひとつ取り出し、食べていた。もしかしてそこにバラで突っ込んであるのだろうか。
ふたりは止めていた足を、改めて踏み出す。
周は横目でちらと翔子を見た。目鼻立ちのはっきりした、なかなかの美少女だ。手足もすらりと長く、大きな目を前に向けて歩く姿には躍動感があり、非常に快活、且つ、綺麗だ。
「フルイチさんも家、こっちなんだよな」
口の中のものを飲み込んでから、当り障りのない話題を振ってみる。
「うん、そう。もう少し先。……タカオ君は？」
「俺ももうちょい」
もうすぐ見えてくるころだ。
「あ、じゃあ、けっこう近いのかも。この辺マンション多いもんね。学校も近いし、便利」
「でも、今はいいけど、夏になったら死にそうだな。学校に着くころにゃ溶けそうだ。チャリンコ通学って手もあるな。……こっちに持ってきてないけど」
「あれって申請いるんじゃなかったかな？」
「マジか。そりゃ面倒だな」
そうこうしているうちに周と月子の住むマンションが、目の前に迫ってきた。建物の前の敷地は植え込みでお洒落に飾られていて、その向こうにエントランスホールが見える。
周は話しながらそこに入っていく。
翔子も入る。
「もしそうなったら後ろに乗せてってもらおうかなぁ」
「本気で勘弁。ゴ高の前って坂なんだからさ」

護星高校――背後に山が迫る天然の要塞である。
ふたりはそのまま自動ドアをくぐりエントランスへ入った。周はついでに集合ポストも覗いていく。自分のところを開けて出てきたのは、賃貸物件や自転車修理云々のチラシばかり。
「あ、ちょっとどいて。その下、うちだから」
「おっと、悪い」
翔子に言われて場所を空け、
「って」
そこではたと気づいた。
「「　え？　」」
ふたり同時に発音し、顔を見合う。……もっと気づけと。コントか。それから今度は集合ポストへ目を向ける。
「『古都』でフルイチなんだな」
「あー、タカオってこの字なんだ。『高尾』だと思ってた」
各々納得する。要するに、お互い普段から字は目にしていたのだ。ただ、読めなかったり、本人の自己紹介からそこに結びつかなかっただけで。
「４階？」
「４階」
ポストの並びと部屋の番号を見れば一目瞭然だ。
「超・ご近所さん！」
近所どころの話ではない。
「そう言えば、どんなやつが住んでるかなんて、あんまり気にしてなかったな」
「ですです。わたしも」
ふたりは階段で４階まで上がった。
「どっち？」
「こっち」
「わたしこっち」
それぞれ反対方向を指さす。

このマンションは1フロアに4つの部屋がある。階段を中心に左右に延びた通路を軸にして、四角形を描くように配置されているのだ。周と翔子の部屋は対角線に位置していた。
「今度遊びに行こうかなぁ、なんて思ったりして」
「いや、それは……まぁ、そのうちに」
周の口からは苦笑いしか出てこない。
「あ、わたしも部屋、片づけとこうっと。いつでも鷹尾くんがきてもいいように。……じゃあね」
「ん、ああ」
天真爛漫な笑顔で手を振り、去っていく翔子。
天真爛漫が故に無防備なほどに無邪気だが、2ヶ月、3ヶ月前までは中学生という肩書きだったことを考えれば、それも無理からぬことなのかもしれない。
「俺も家ん中きれいにしといたほうがいいのかな」
果たして、きれいにできるだろうか。逆にきれいにされそうな気がしないでもない。
周も翔子とは反対に向かって歩き出し、我が家のドアノブに手をかけた。
「ただい……おごっ」
その周を待ち受けていたのは鋭い手刀だった。
「おおおぉぉぉっ」
それは正確無比に喉に突き刺さる。迎え突きの地獄突きという新技を喰らった周が、思わず喉を押さえてうずくまった。
本気で痛い。
涙目になりながら顔を上げると、そこにはメイド服で武装した月子が、いつものように出迎えに立っていた。ただし、いつもより3割増無表情。
「ぁにすんだよ！？　ちゃんと遅くなるって言っといただろっ」
連絡もせずに遅くなったら地獄突きを喰らうかもとは思ったが、まさか連絡しても喰らうとは思わなかった。

「今日から挨拶はこれになりました」
「意味がわかんねぇよ」
「大丈夫です。私にも微妙に意味不明です」
しれっと月子。
「ますますもって意味がわからんわ。あー、痛……。まさか毎日これかよ」
「周様次第です」
「……」
どうやら何かトリガーがあるらしい。それがわからないうちは広辞苑でも構えながらドアを開けたほうがいいのかもしれない。実に愉快な帰宅風景である。
「それと、」
と、月子はつけ加え、
「マンションの廊下での立ち話は近所迷惑になりますよ」
そして、踵を返してリビング方面へすたすた去っていった。
……。
……。
「おお、それか」
なるほど。それで制裁の地獄突きだったのか。しばらくしてようやく理解した周は、とんと拳を打ち鳴らし、月子を追うように玄関を上がった。
勿論、それが正解かどうかは定かではないが。

第12話　「戦うメイドさん」（1）

「鷹尾っていいとこの子なのに、こんなものも食べるんだな」
周がハンバーガーにかぶりつくのを見て、天根小次郎がそんな感想をこぼす。
「別にうちはよそより金持ってるってだけで、由緒ある家柄ってわけじゃないからな。普通に喰うよ」
かと言って、好きなものを好きなだけ食べてきたかというと、それはまた別の話。愛情過多の両親のおかげでいいものを食べて育ってきたのは確かだが、逆にこういうものを口にする機会は一般家庭よりも少なかった。
言い終えて、またひと口食べる。
――その日、6時間目の授業が急に休講になった。
周はこれ幸いとばかりにさっさと学校を切り上げ、友人の岡本哲平、天根小次郎とともにファーストフード店で寄り道をしている最中だった。
せっかく早く学校が終わったのだからストレートに帰路についてもよかったのだが、予定外の時間に帰るとまだ月子が大学から帰っていないような気がするのだ。……なぜここまでメイドに気を遣う必要があるかよくわからないが。
「お前ももの好きだーよな。家にいりゃなに不自由ない生活が保障されてるってのに、わざわざその家を出るなーんて」
今度は岡本。
「不自由のない生活というのは、それだけで巨大な不自由を成してるんだよ」
「哲学的だーねぇ。どちらにしても勿体ない。いいよなぁ。大きなお屋敷だとメイドさんとかいたりするんだーろ？」
「……」
一瞬、今もいるけど、と言いそうになった。最近のメイドさんは

大きなお屋敷だけでなく、２ＬＤＫのマンションにも棲息するんだぞ、と。
「いるのはいるけど、どちらかと言うと家政婦って言葉が似合う人ばかりだな」
特に月子の母親は程よく恰幅がよくて、妙に頼もしい雰囲気の人物だ。その娘があの月子だとはとうてい思えない。いろんな意味で遺伝子の神秘を感じさせてくれる母娘だ。
「そりゃーあ残念。でも、一度は言われてみたいよな。『お帰りなさいませ、ご主人様』とーかさ」
「……」
それに似たフレーズが最近すっかり日常化している周。何となく凹む。
「しかも超美人で、にっこり笑って言われたら最高」
「だからそんなメイドはいないっつーのっ」
思わず意味もなくむきになって否定してしまう。……しかし、いるのである、家に帰ればそこに。多少表情に乏しくはあるが。
「……鷹尾。大声出すとこっちまで恥ずかしいぞ」
迷惑そうに言う小次郎。メイドにけったいな憧れを抱いたり、いきなり不可解なキレ方をしたりするやつらと一緒にされたくはないと言いたげだ。
「わ、悪い……」
謝ってから、周は周りを見回した。
しかし、話が盛り上がって大声を出すような高校生などファーストフード店には珍しくもないのか、こちらに注目しているものはほとんどいなかった。
が――、
（って、あれ……）
そこにそのメイドが、いた――。
店内に月子の姿があったのだ。
当然、エプロンドレスなどではなく、デニムのロングパンツにタ

ンクトップとオフショルダーのロングTシャツという飾り気のないスタイルだったが、どことなく色気があって、普段見る彼女とはぜんぜん違った雰囲気だ。

月子も周同様、友達と学校帰りにここに立ち寄った様子だった。同じテーブルには同世代の女の子が何人かいて、これまた家では絶対に見ることのないやわらかい表情で談笑している。

――ふと、月子と目が合った。

瞬間、驚いた月子の口が「あ」の発音で開かれ、彼女はばつが悪そうに慌てて目を逸らした。周も周で見てはいけない場面を見てしまったようで、申し訳ない気持ちとともに視線をもとに戻す。

こんなところで遭うとは、完全に予想外の事態だ。

ふたりのクラスメイトが、月子が周の近しい人間だと知ったらどうなるだろう。まさかメイドだと見抜くことはないだろうが、バカの岡本は喜々として寄っていくかもしれない。

「……」

それはあまり面白くない光景に思える。

周は我知らずむっとしていた。

幸い、月子は岡本や小次郎から見て背後に位置するので、振り向かない限り気がつくことはないだろう。気がつかれたところで知らない振りをすればいいだけのこと。周はこのまま最後まで黙っていることにした。

とは言え、普段見ることのない月子の姿に、どうしても横目で追うのはやめられない。

（そっか。月子さんって普段はわりかし普通なんだな）

考えてみれば当然か、と納得する。

一方、周に見つかってからそわそわと落ち着かない様子の月子だったが、どうやら友達に別れを告げて席を立つことにしたようだ。周が予想外に早く帰ってきそうだからかもしれない。だとしたら悪いことをしたと思う。

月子が立ち上がる。

が、しかし、タイミングが悪かった。慌てていて周りをよく見ていなかったのか、立ち上がったと同時にちょうど横を通っていた男子高校生と接触してしまった。少年が持っていたトレイを肩で持ち上げるようなかたちでひっくり返してしまう。
ハンバーガーのセットがトレイとともに盛大に散らばった。
「す、すみませんっ」
月子がすぐに自分のトレイをテーブルに置いて、床に落ちてしまったものを拾い集めようとする。
あるいは、ここまでならば「ドジだな」と笑ってすませられたかもしれない。
「なにすんだよ！」
しかし、その男子生徒は虫の居所が悪かったのか、単にキレやすい性格だったのか――烈火の如く怒りを露わにしたのだった。一見して素行の悪そうな少年でもなかったので、これには周も驚いた。
「ざけんなっ」
「きゃっ」
しゃがみかけていた月子の肩を少年が押して突き飛ばした。小さな悲鳴を上げて月子が床に崩れる。
「お姉さんさ、こんなことして謝るだけですむと思ってないよね？」
少年は月子に近寄ると、ロングTを乱暴に引っ張った。元々オフショルダーで大きく開いていた肩の部分がさらにはだけて、下に着ているタンクトップが見える。
そばには連れ合いらしき少年達もいたが、彼のこの豹変ぶりには驚いたようで、ただただ戸惑うばかり。止めるに止められない様子だ。
「ねえ、ちょっとつき合ってよ」
その猫なで声の裏に何があるかはすぐにわかる。
周もさすがにそれ以上は見ていられず、ほとんど反射的に席を立っていた。
「おいおい、こまでにしとこうぜ」

「あぁ？」
威嚇するように少年が周へと振り返る。
「シュ……」
その向こうでは月子が周の愛称を呼びかけたのだろうが、途中で掌で口を覆うようにして言葉を飲み込んだ。
「その人も謝ってんだろ？　ここは大人になろうぜ。笑って許せとは言わないけどさ、まあ、新しいの買ってもらって、それですませたらどうだよ？」
他人の振りをし、月子を指して「その人」と言う。
「関係ない奴は引っ込んでろっ」
「ッ！？」
気がついたときには少年の拳が周の腹にめり込んでいた。腹を押さえて周の体がくの字に折れ、そこを今度は顔面を殴られた。
「がッ」
倒れて床を滑る。異性にあれだけのことができる少年は、同性にはさらに容赦がないらしい。しかも、何か格闘技でもやっているのか、やけに拳が鋭い。
「おらあっ」
のろのろと上半身を起こしかけた周の胸板に次は蹴りが叩き込まれ、再び床を這い蹲らされた。
ああ、失敗したな……――そんな思いが頭をよぎる。まさかここまでもものわかりが悪くて暴力的だとは思いもよらなかったのだ。
と――、
「シュウから離れなさいっ」
月子の声が凛と響いた。
いつの間にか清掃用のモップを持って立っている。
「おいおい、お姉さん。そんなもの持ってどうするつもりだよ」
まだ周に暴行を加えるつもりだった少年が振り返った。
少年の目には月子が震える手でモップを握っていると映ったのだろう。ヘラヘラと小馬鹿にしたような笑みを浮かべて近寄っていく。

だが、決着は一瞬でついた。
月子は素早くモップの止め具を外し、先端の雑巾の部分を丸ごと取り去ると、ただの棒になった柄を構える。少年はその姿に不吉なものを感じ、警戒の色を見せた。それこそ格闘技の経験からくる直感だったのかもしれない。
が、すでに遅かった。
喉の下に月子の初撃の突きが入り、ひるんだところに足を払われて無様に尻もちをつく。そして、とどめに鳩尾を突き込まれ、少年はあっさりと昏倒した。
流れるような連続技。
まさに瞬殺だった。
呆気に取られながら周は、今後月子には決して逆らうまいと思った。

「あー、痛て……」
曇り空の家路を周と月子が往く。
周の頬には月子から借りたハンカチが濡らして当てられ、周はそれを手で押さえながら歩いていた。
「しっかし、月子さん、強いね」
「メイドの基本です」
斜め後ろを歩く月子は、完全にメイドモードに戻っていた。
「そりゃ初耳だ」
そんなところにメイドの基本があったとは驚きである。
「母は剣道、柔道、合気道等々合わせて三十一段でした」
「げ。そうだったのか……」
周は恰幅のいい藤堂の姿を思い出すが、とてもそうは思えない。
いつも豪快に笑いながら次々と仕事をこなしていて、そんな素振りは微塵もなかった。時折「早く勉強しないと大変な目に遭わせますよ」とか、「そんなことを言う子は二度と口答えできないようにして差し上げますよ」などと冗談めかせて言っていたが、今にして思

えば密かに生命の危機にさらされていたのかもしれない。
「母が主に徒手空拳を得意としていましたので、私は武器格闘を中心に習得しました。弓道、剣道、薙刀、居合いなどです。無論、武器がなくても十二分に戦えますが」
いったい誰と戦うつもりなのか。
「因みに、書道は三段です」
「ああ、月子さん、字がきれいだもんな」
「筆一本あれば空手家の正拳を受け止められます」
「書道は格闘技じゃねぇよっ」
なお、後に周がその師範代と出会ったとき、彼は「まるで鉄板を殴ったような手応えだった。しかも筆も折れなかった」と語り、周は「あんた何で筆持ったメイドさんに正拳を打ち込もうと思ったんだよ」と突っ込んだという。
「おけ。今後は月子さんの言うことは素直に聞くことにするよ」
「そんなにかしこまらずともよろしいかと」
「そうか？」
「はい。多少反抗された方が私も仕事に喜びを見出せます」
「……」
どんな喜びだ。
周が振り返ると、月子はいつものように白々しく顔を背けた。
「……」
「……」
無意味な沈黙。
周は再び顔を前に向けた。
そう言えば、月子は何かにつけて手が早いことを思い出した。このままでは周のほうが先に妙な悦びを見出してしまうかもしれない。
周は何となく祈るような気持ちで天を仰いだ。
と、その顔に冷たいものが当たった。
「……雨だ」
「そのようですね」

月子も掌で雨の滴を受けて確認する。
「月子さん、傘持ってる？」
「いえ、残念ながら」
首を横に振った。この雨は月子にも予想できなかったようだ。
当然、周も持っていない。
「仕方ない。走ろう、月子さん」
「え？」
すでに周は走り出している。
「ほら、早く。濡れて帰るつもりかー？」
走りながら振り返り、早くこいと急き立てる。
月子はそんな周を見て、懐かしいものでも見るかのように目を細め、そして、周を追って駆け出した。

〃　「戦うメイドさん」（2）

周と月子が家に辿り着くころには、髪も服も雨に濡れてすっかり湿り気を帯びていた。ずぶ濡れというほどではないが、それでも肌寒さを覚える。

唯一この家の鍵を持つ月子がドアを開錠した。

と――、

「周様」

ドアノブに手をかけたところで手を止め、月子が振り返る。

「帰宅した主を出迎えるのもメイドの仕事だと思います」

「そう、なのかな」

それが正しいのか判断できない周は、曖昧に頷く。とりあえず月子がそれを仕事のひとつとして自分に課していることは確かだ。

「……」

２ＬＤＫのマンションでメイドが、「お帰りなさいませ」――。人として当たり前の何かを欠落させてしまっているような気がしないでもない。

「ですから先に私が入り、着替えてきますので、ここで１０分ほど待っていてもらってもよろしいでしょうか」

「いいわけあるかっ」

そこまでこだわる必要がどこにあるのか。

「それは俺に風邪を引けってのか」

「では、５分で」

「刻むなっ」

「しかし、あの服はあれでいてなかなか着るのに時間がかかり、これ以上の時間短縮は難しいかと」

「まあ、そうだろうな……」

周は同意し、心当たりのある過去の映像を思い出し……

「おごっ」

ていると、喉に地獄突き（ヘルスタッブ）が飛んできた。
「忘れてください」
と、戦闘メイドさんは静かに要求する。
「へ、へい……」
とは言え、忘れろと言われて忘れられるほど、この件に関する年頃の少年のシナプス結合は甘くない。なので、周はこの話題は以後タブーとすることにした。このままでは「君が記憶をなくすまで殴るのをやめない」などど、しこたま頭を殴打されかねない。
「とりあえず形式にこだわってないで、とっとと入ろうぜ。風邪ひきそうだ」
いいかげん家の前に着いてから5分が経とうとしている。
「それでは略式で。……どうぞ」
そう言うと、月子はドアを開けてから道を譲るように脇に退いた。
「ただいまー」
周が先に入る。
声を投げかけるべき相手は後ろにいるのだが、それでも言ってしまうのはドアをくぐるときの儀式のようなものだからだろう。
そうして玄関で靴を脱ぐ。
「もたもたしてないでとっとと入ってください。後がつかえていますので」
「略式だとここまで扱いが悪くなるのかよっ」
何か理不尽なものを感じながら、さっさと靴を脱ぎ飛ばして玄関に上がった。
そこから歩いて数歩の、自室の前。
「くしゅ」
後ろで小さなくしゃみが聞こえた。
振り返れば月子が、脱ぎ散らかされた周の靴を並べていた。顔は見えない。代わりにその背中を見て、「小さくて細いな」と周は思った。
「……ま、かがんでるんだから当然か」

だが、すぐにそう結論する。
やがて月子が立ち上がる気配を見せたので、周は逃げるように部屋へ這入った。
閉めた扉の向こうを、軽い足音が通り過ぎていく。
それが聞こえなくなったのを確認してから、ようやく鞄を床に放り投げた。
ポケットに入っていたハンカチで濡れた髪を軽く拭く。本日最後の役目だ。しかし、マンションに辿り着いたときに顔と制服を拭くのに使っているので、あまり効果はなさそうだ。後でタオルを取ってこないといけないだろう。
次に制服から部屋着に着替え、それを終えてから廊下に出る。目指すは洗面所兼脱衣場。タオルを取りにいくためだ。
が、脱衣場には先客がいた。月子だ。
「周様。今ガスをつけて、お湯を入れはじめました。入れながらになりますが、風邪を引かないうちに入ってください」
そう言われたら浴室の方から湯を出す音が聞こえる。確かに冷えた体を一度温めた方がいいのかもしれない。
だが、そう勧めた月子はまだ髪を濡らしたままで、服も着替えていなかった。きっと先に風呂の用意をしていたのだろう。
「いや、俺はいい。先に月子さんが入ってくれ」
「は？」
「俺は男だし、ちょっとくらい大丈夫だから」
「……と言いつつ、一時間ほど前はボッコボコにやられてましたが」
ぼそっとひと言。
ボッコボコの周を助けたメイドさんは言う。
「いいんだよっ。それとこれとはジャンルが別だから。兎に角、月子さんに風邪をひかれたくないんだ」
「で、でも……」
「いいからっ。そのまま入れ。風呂に入るまで出てくるなよ。わかったな、月姉っ」

もはや問答無用とばかりに強く言うと、手近にあったタオル一枚を手に取って、脱衣場を出た。
「ったく、もう……」
何だかわけのわからない苛立ちを込めて、がしがし頭を拭きながらリビングへ。いつもの座椅子に座り、テレビを夕方のニュースに合わせる。
月子が戻ってくる様子がないので、どうやら素直に風呂に入ってくれたようだ。ほっとする。
しかし、得てしてトラブルというものは忘れたころにやってくるものである。
それから約３０分後――、
「周様……」
ひかえめな月子の声が、テレビを見ていた周の耳に届いた。
振り返ると月子が、リビングのドアの陰から顔だけを覗かせてこちらを見ていた。乾き切っていない肌と髪が艶っぽい。
が、それよりもその奇妙な構図は何なのか。
「ど、どうしたのさ？」
「周様がすぐ入れと言ったせいで、着替えなどを用意していなくて……」
「げ」
要するに今の月子は裸、ということはないだろうが、おそらくバスタオルを巻いた程度の状態なのだろう。
「じゃあ、俺は一度部屋に――」
「ッ！？」
月子が慌てて顔を引っ込めた。周も立ち上がりかけて、動きを止める。
部屋は廊下の途中、月子の向こう側である。まさか彼女の横を抜けていくわけにもいかない。
「え、えっと、それじゃあ、俺はこのままテレビ見てるから……」
月子の私室へはリビングを通らなくてはいけないが、位置的には

テレビを見る周が首を動かしさえしなければ、ほとんど視界に入ることなく行くことができる。
しかし、落ち着いて考えればもっとよい方法がいくらでもあるのだが、ふたりともよほど頭の回転数が落ちていたらしい。
「わ、わかりました……」
月子も緊張した声音で首肯した。
周がテレビに向き直る。
程なく、トトト……、と小走りの足音が聞こえてきた。
少し首を動かせばかなりきわどい姿の月子が見られるはず。そう思うと心臓が早鐘を打つ。
当然、そうしたいという欲求があり、してはいけないという理性がある。
やがてわずかに絶対値で欲求の方が勝り、それは結果として横目で覗き見るという行動になって表れた。……目だけを動かし、そちらを見る。
「ッ！？」
飛び込んできたのは、部屋に駆け込む月子の艶かしい素足だった。
それはいつもはロングスカートに隠されていて、いつぞやの事故のようなことがない限り絶対に見ることのできないもの。
それだけで周の罪悪感を煽るには充分だった。
「お、俺も入ってくるからっ」
声のボリュームを上げて、ドアの向こうに消えた月子に告げる。
別にわざわざ言わなくても黙って入ればいいようなものだが、もうリビングにはいませんよ、とアピールしておきたかったのだ。
そうしてから周はその場から逃げ出した。
結局、その後リビングに戻るタイミングがつかめず、一時間以上も湯船に浸かっていたのだった。

翌日――、
「何が、ちょっとくらい大丈夫だから、ですか」

周はしっかり風邪を引いていた。
「だから、先に入れと言ったのです」
メイドさんはベッドで寝込む主を冷たい目で見下ろし、呆れたように言った。
実際にはそれだけが理由ではなく、無駄に長時間湯船に浸かっていて、風呂から出た後に湯冷めしたのが原因なのだが。尤も、先に入っていればこうならなかったという点においては真ではある。
「いや、面目ない……」
そして、謝るしかないのも確かだった。
「周様はいつもそうです」
「死人に鞭打つかよ……」
文句を言いたいが、熱があるせいであまり力のこもった言葉にならなかった。
「いえ、褒めています」
昔からそうでした――と月子はほんの少しだけ表情と言葉を和らげる。
「ん、なに？　あぁ、頭がぼうっとして何がなんだかよくわかんねぇ……」
「……いえ、何でもありません。それよりも、熱があるのですか？」
そう言うと月子は周に手を伸ばした。
そっと前髪をよけ、その額に手を触れる。
途端――、
「ぶわっ！　いいっ！　いいんだよ、そんなことはっ」
周は慌てて月子の手から逃れるように顔を振った。
「熱なんかあってもなくても今さらたいした問題じゃないんだから。兎に角、今日はこのまま寝てるから」
月子に背を向け、掛け布団を口元まで引っ張り上げる。
まるで隠れているようだ。
「……わかりました。何かあれば呼んでください」
そう言って月子は部屋を後にした。

周はそれを背中越しに耳で確認してから、くぐもった声でつぶやく。

「あー、くそ。今、絶対熱上がったよな……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4227i/

50%&50%

2011年2月21日21時40分発行